

### 「主は招いておられる」

那覇平安教会 辻林 和己



幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国は、このような者の国である。  
マルコ10：14

空と海が碧く輝き、自然豊かな沖縄は亜熱帯気候の地域に位置しています。この気候も要因の一つですが、私共の周辺は「夜型社会」になっていて、これは子どもたちの生活や健康に良くない影響を与えています。そこで、那覇市ではゴーヤー運動という取組みがあります。これは英語の「GO」と沖縄の方言の「家」(ヤー)を掛け合わせた言葉で、夜、スーパなどで「早く家に帰ろう」と放送されます。

ゴーヤーは沖縄県を代表する夏野菜の一つです。真夏の太陽の光を燦々と浴びて、花が咲き実をつけグングンと力強く成長するゴーヤーのように、子どもたちがイエス様の光を受けて成

長し、帰るべき真の家、御国の希望をもって生きてほしいと願います。

幸いなことに沖縄では超教派の交わりが活発です。真剣にゲームや遊びに取り組み、子どもたちを喜ばせつつ福音を伝えておられる先生、自然環境を生かし、実地教育を通してみ言葉を語られる方々等、沖縄でしか出会えないようなユニークで、かつ全力で奉仕しておられる牧師や信徒の方々から大きな励ましと示唆をいただいています。夏には福音派の教会が合同でティーンズバイブルキャンプを開き、幼児や小学生も多数参加しています。教師も生徒も思いつき遊び、賛美し福音を聞き、さらにお兄さんお姉さんたちの奉仕や賛美する姿を通して子どもたちが良い刺激を受けています。そして、互いに愛しあい協力しあう神の家族に子どもたちが招かれ、加えられています。

米軍基地や尖閣諸島の問題等様々な課題がこの地にあり、少なからず子どもたちの心の奥深くに不安があります。教団教派の違いを超え、チームワークを生かして主のもとへ子どもたちを導き、真の平和が沖縄の子どもたちから広がっていくことを祈っています。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座	3
「♪さんび・・・まず、あなたがいきいき! No 2」	3
キリストのみわざ	11
旧約③「モーセ」	23
クリスマス・年末	59
カリキュラム	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	90
おわりに	90

### 〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教  
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出  
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子  
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以  
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

# ミセス・グレースからあなたに ♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！ No.2

音楽工房 GRACE K&K (株)

田中恵子 (神戸中央教会員)



あなたの道をこの地が知り  
御救いをすべての民が知るために。

神よ、すべての民が

あなたに感謝をささげますように。

地の果てに至るまで

すべてのものが神を畏れ敬いますように。

詩篇67篇 (新共同訳)

♪今日は晴れです。日曜日！♪・・・という曲があったのを覚えておられますか？ 長島幸雄先生がご存命で、神の国教会を牧されていた時、CSのためにと作詞をされました。

♪今日は晴れです、日曜日。聖書を持って教会へ。生

まれ変わった私です。・・・ホサナホサナと歌います。

私の長女が2歳くらいの時で片言で歌っていました。

たしか二番は、♪今日は雨です、日曜日・・・だったと思います。

私はその詩に曲をつけるように言われて、たしかその頃の牧羊者に載せて頂いたり、教師研修会でも歌ったように記憶しています。



さて、皆さんのご奉仕される教会学校の子どもたちは、毎週日曜日、何をするために、晴れの日も雨の日もやっ

てきてくれるのでしょうか？

これは考えたらすごいことなのです。

学校と名がついていても、教会学校は、義務教育の学校ではありません。

そして、教会を会場に教会学校を開いておられる所ばかりでなく、会館を借りられたり、もしくは家庭を開放されたり、または、公園でいうところもあるでしょう。日曜日まで学校というところに行かなくてもいいやと思われても仕方ないのに、子どもたちは、やってきます。人数は少なくとも、コンスタントにレギュラーメンバーは、やってくるのです。

「静かにして！」「じっとしてお話聞いて！」先生たちから様々な諸注意を受けても、また、お友達と上げ足の取り合いで、けんかになっても次の週には来てくれるのです。

何が彼らを押し出すのでしょうか？

さきほどの質問に大人の答えは、決まっています。「神様を礼拝しに行くのです」という模範解答です。

でも、子どもたちの答えは、「なんでかわからへん」。クリスチャンホームの子女は正解を知っています。ど

う答えたら大人が喜ぶか。

しかし、私たち教師は、正解を聞いて満足してはいけません。私とその模範解答をしてきたものだからわかります。

「わからへん」との答えに注目です。どうしてか「わからへん」けど「いかなあかんもの」になっているのです。それは、教会学校が楽しいから、先生が誘ってくれるから、先生が優しいから、お友達と会えるから、時々楽しいイベントがあるから……。

きつと理由は様々でしょう。でも彼らは来るのです。いや、来てくれるのです。

どの理由であれ、彼らは来て、福音を聞くのです。彼らを喜んで迎え、接し、神様の愛を自らの言動、思いの中から証していくのが、教師の役目だと思います。

神様ってすごいねんで！ 私の人生を変えてくださったんやから。

イエスさまっていつも私たちといっしょやねんで！

君たちも愛されているんやで・・・と口には出さなくても、そのような思いをもって、子どもたちに接したいと思います。

子どもたちは、教師であるあなたを通して神様を第一とする本当に大切なことを教えられていくのです。

あなたは、本当に心から神様を礼拝する礼拝者ですか？と問われているような気がします。

私たちは、奉仕者である前に、礼拝者です。神様の前に謙遜になりたいと思います。



ここで、ご一緒に礼拝の意味を確認しましょう。

礼拝は英語で worship(ワーシップ)とか service(サービス)といいます。

worship は絶対的な尊敬・敬愛の念を抱くこと、service は仕えることと言われます。

礼拝は、神様よりも目に見えるもの、人や世のものに価値を見出し、価値を置きやすい私たちを正しい方向に導いてくれます。

神様のみこころを、また神様の喜ばれることを礼拝によって知り、神様に栄光を帰すことが一番人生で価値のあることだと理解させてくれます。そして、私たちの人

生を豊かに実を結ぶものとしてくれるのです。

私たちは、礼拝を通して多くのことを教えられ、示されます。

神様の御業を知り、神様と人とのこの世の関係をはっきりと区別し、わかりやすくします。

世界は神のみ言葉によって創造され、全ては神の御手の中にあります。

私たちが、畏れ敬う方おそは一人しかおられません。つまり、礼拝の対象は神様のみだということです。

自然界、世の全ての被造物は神様によって作られ、神様の栄光の為に人に管理を任されているのです。

この関係と秩序を知るなら、被造物を拝む偶像礼拝に陥ることはないのです。



詩篇8・1～10をお読みしましょう。

主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう。

あなたの栄光は天の上にあり、

みどりごと、ちのみごとの口によつて、

ほめたたえられています。

あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため、

あだに備えて、とりでを設けられました。

わたしは、あなたの指のわざなる天を見、

あなたが設けられた月と星とを見て思います。

人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、

人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。

ただ少しく人を神よりも低く造つて、

栄えと誉とをこうむらせ、

これにみ手のわざを治めさせ、

よろずの物をその足の下におかれました。

すべての羊と牛、また野の獣、

空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも。

主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、

いかに尊いことでしょう。

礼拝において、私たちは、まず、私たちを愛してくださった神の愛を知ることができ、救<sup>ゆる</sup>されたものとして他

の人を救す、また愛する愛を育てられていくのです。

その愛に押し出されて、相手がどんな小さな子どもでも、こちらが情熱をもつて、わかりやすく真理を語るなら、きっと理解できるはずです。



さて、教会学校でも、必ず神様を賛美する歌を歌います。

最近では、さまざまな楽曲がありますね。世間の音楽が多様化している時代です。子どもたちはエネルギー感の躍動するリズム感の中に生活しています。いわゆる「フリ」のいい音楽が大好きです。その楽曲に神様を讃える歌詞をつけて歌うとき、子どもの顔が輝いています。子どもたちは大人が閉口するような裏打ちのリズムも、平気で歌いこなします。

子どもたちのほとんどは、耳コピです。

「なに耳コピって？」と言っているあなた！ 子どもたちのハートをつかむためにはこれくらいは知っておい

てください。

つまりは聞いて覚えてしまうのです。その吸収力たるやすごいものです。それだけに、間違つて覚えてたら大変です。教える先生たちには責任があるのですよ。

私の父は明石で60年牧会を続けている牧師です。この父の若い時代、讃美歌は楽譜を見て覚えるのではなく、宣教師の先生方から先輩の先生たちが聞いて覚えられたのをまた聞いて覚えたのだそうです。

伝言ゲームという遊びをご存知ですか？ たくさんの人を介すと最後にはとんでもないおかしいことに伝わっていくものです。父たちの讃美の中にはその要素が時々垣間見られ、音が間違っていたり、リズムが間違っていたり・・・。

1度覚えたものって、なかなか正しくはなりませんね。みなさんは、ぜひ、正しくしっかり覚えて教えてくださいます。

加えて、賛美が楽しい、うれしいと感じるようにしてあげなくてははいけません。賛美は、神様を心からたたえる手段であり、神様を証しすること、誇ることに、神様の愛に応答することだと言われます。

賛美には力がありますね。私たちは何度となく賛美によつて励まされ引き上げられてきたことでしょう。賛美の中に住まわれる神様はその中に働いておられます。

けれども、あなたは聖であられ、  
イスラエルの賛美を住まいとしておられます。

詩篇22・3（新改訳）

教師も子どもたちも共に賛美させていただくことで神様に近づき、癒され、はげまされ、力を得ていくのです。その賛美が、元氣のないあやふやな賛美ではこまりません。教師は、率先して大きな声で楽しそうにリズム感よく歌えなくてはいけません。

伴奏のピアノやオルガンの方、どうぞ練習してください。楽譜を見ないでも弾けるまでがんばってください。子どもたちを見て、弾けるようにしましょう。

楽譜にかじりつかないでください。その眉間を寄せている姿を子どもたちは見ています。

賛美の声にあたふたについて行かないで、どうぞ子どもたちが力いっぱい賛美できるように。

賛美をリードされる方、どうぞ歌詞は覚えて子どもたちの顔を見ながらいい笑顔で歌ってください。歌いながら、「さあ！ もっと大きな声で」とか「顔をあげて」「さあ！ もう一度最初から」など賛美をリードして歌ってください。

もし、同じ教会の若い青年がいたら、ギターやキーボード、ドラムやカホン、その他の楽器で協力してもらってください。

その場合は、必ず何度も練習を積んで、心を合わせてください。にわか仕立てはよくありません。

そうすると、賛美が生きてきます。その人たちも奉仕の喜びにあずかることができます。その人たちも奉仕

でも、一つご注意いただきたいのは、なんでもかんでも元氣いっぱい、リズムいっぱい、音量マックス、ではなく、TPOに合わせた曲選びと歌い方に気を配ってください。

元氣いっぱい、の賛美で子どもたちの心が主を喜び、じつくりと歌う賛美で心を主に向ける、そして、メッセージを聞く体勢を作る。

もしくはその反対で、元氣いっぱい、の賛美で解きほぐ

され、そこにメッセージが込みこんでいく・・・などいろいろな方法もあると思います。

試行錯誤し、それぞれの教会学校のカラーを作ってみられてはいかがでしょう？

感謝の歌を声高くうたい、

あなたのくすしきみわざをことごとくのべ伝えます。

詩篇 26・7

あなたのご奉仕が祝福されるようにお祈りします。



では、次のページは、必見！ 「元氣の出る伴奏型」。

アレンジです。楽器をお弾きになれる方はもちろん、そうでない方はどなたかに弾いていただいて実際に体験してください。1回くらいではだめですよ！ 最低4回、そう4番まで歌ってみてください。



### ミセス・グレース ♡ ワンポイントレッスン

伴奏型を少し変えるだけで贅美がいきいきします！

もちろん、讃美歌そのままでも十分美しいので、

1 節は讃美歌通り、2 節からアレンジを用いてくださっても構いません。程度は中級です。よく練習してくださいね！

# 元気の出る伴奏型！ 「主われを愛す」

Arr. KEIKO 恵TANAKA

The musical score is written in 3/4 time and consists of three systems of three staves each. The first system begins with a treble staff containing four measures of rests, followed by a melody staff and a bass staff. The second system starts at measure 5 and features a treble staff with a melody, a chordal accompaniment staff, and a bass staff. The third system starts at measure 9 and continues the same pattern. The key signature has one flat (B-flat) and the time signature is 3/4.

# 聖書 マタイ14・22～33 テーマ 逆風の中でキリストを見る

## 序論

(高橋頼男)

パンの奇跡に喜び興奮した群衆がご自分を王にしようとして熱狂しているのを知られたとき、主イエスは、群衆と弟子たちを分け、弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸へと出発させ、また、群衆を解散させられました。そして、ご自分とは、一人で祈るために山に登られたのです。

## 一、逆風に漕ぎ悩み、恐れる弟子たち (24～27)

主イエスに強いられて船に乗り込み、向こう岸を目指して出発した弟子たちでしたが、沖で向かい風に悩まされ、思うように進むことができません。夜通し漕ぎ、疲れて、夜中の三時頃になって暗闇が最も増すとき、イエスが水の上を歩いて来られるのを見ました。弟子たちは「幽霊だ!」と言って、叫び声を上げました。

ここには、逆風を恐れ、暗闇を恐れ、さらに、湖を歩いて近づくられる主イエスを幽霊と見間違えて恐れる弟子たちの姿があります。彼らは信仰ではなく、恐れに満ちています。私たちの信仰生活の中でも、厳しい現状に捨て置かれたよ

うな思いになって不安と恐れに捕えられ、不信仰に支配されてしまうことがあります。主イエスに従って船に乗り込み、漕ぎ出したはずなのですが、暗闇の中で漕ぎ悩んでしまいます。しかも、船の中に主はおられず、逆風がよいよい吹き荒れ前進できません。逆風とは真正面から吹いてくる風です。これからどうなっていくのか全くわからない不安と焦り、恐れに捕らわれてしまうのです。しかし、私たちが主イエスとそのみ言葉に従っているのなら、暗闇も逆風も決して恐れることはいらないのです。なぜなら、主イエスはどんな状況の時にも私たちのことを見ておられ、執り成していただくからです。そして、闇が最も濃くなる時、私たちの思いもよらない方法で、私たちを助けるために近づいてくださり、船に乗り込んできて、すべてを支配し静めてくださるのです。主は弟子たちを強いて船に乗り込ませられ、湖の中で試みに会わせられました。これは主の訓練であつたと思われまふ。同様に、主はわたしたちをも、沖に漕ぎ出させ、暗闇と向かい風のただ中で、主に信頼することを教えられるのです。

## 二、おぼれたペテロ (28～30)

湖の上を歩いて近づいてこられるのがイエスであること

を認めたペテロは、おそばに行きたいと大胆な願いを口走りました。(主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください)。すると、主はペテロの求めに対して(おいでなさい)と言われました。ペテロが船から一步、水の上に踏み出したとき、なんとペテロは水の上を歩いていたのです。主のお言葉を聞き、お言葉に信頼して一步を踏み出すとき、まさしく信仰による世界が開かれるのです。ところが、ペテロが風の音を聞いてふと波を垣間見た瞬間、たちまち恐れが彼の心に入りました。そして、その恐れはたちまち彼の心と意思を支配したのです。その結果、ペテロは信仰を失って、ぶくぶくと沈んでしまったのです。彼は大声で(主よ、お助けください)と叫びました。そんなペテロに主はすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて(信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか)と言われました。

私たちも、主ご自身から目を離して波風の音に反応して現実を見るなら、たちどころに主のおことばへの信頼を損ない、信仰の世界から離れ、自分をとりまく現実のみが大きくなってしまいます。

### 三、逆風の中で主イエスを見る(ヘブル12・2)

ペテロはなぜ沈んでしまったのでしょうか。彼は主イエスのみ顔を見、(おいでなさい)と言われたお言葉を聞いて一步踏み出した時、湖の上を歩きました。しかし、風の音を聞き主イエスから目を離して、他のものに目を向けた瞬間、恐れが彼の心と意思を支配して主に対する信頼を失わせてしまったのです。それは、彼が「水を踏む信仰とその歩み」を失った瞬間でした。

思いがけない困難が襲ったとき、苦しみや悲しみが押し寄せるときにこそ、イエスを仰ぎましょう。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」(ヘブル12・2、新改訳)。私たちがいつも心がけるべきことは、イエスから目を離さないこと、どんな場合、どんな状況からでも真つ直ぐにイエスを仰ぎ見ることです。「わたしは絶えず主に相対しています」(詩篇16・8、新共同訳)。

### 結論

主イエスから目を離さないでいましょう。いつでもどこからでも、何度でも、主イエスを仰ぎましょう。そして、生きた信仰の歩みを導いていただきましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

「キリストのみわざ」というテーマのもと、今日の箇所は、「パンの奇跡」に続く「湖の上を歩かれるイエスの記事である。

## テキスト

22 **それからすぐ** 前節までのいわゆる「五千人の給食」の奇跡の後。並行記事のマルコもヨハネも、この二つの記事はセットで登場しており、この二つの物語を相補的に理解しなければならないことになる。しいて イエスの強い意志が表された非常に強い言葉である。弟子たちには、自らの行動を選択する決定権はない。

23 **祈るためにひそかに山へ登られた** 福音書においては、イエスの宣教活動における重要な出来事の前や後には、(山に登って)祈るということがしばしば言及される。

24 **数丁** 直訳は「多くのスタディオン」(1スタディオンは約200m)。マルコによれば、この時舟は「海のもの中」(マルコ6・47)にあった。**逆風** ガリラヤ湖特有の突風。

25 **夜明けの四時ごろ** 新改訳では「夜中の三時ごろ」となっている。直訳では「第四の夜回り」となる。当時

のローマ人は、午後6時から午前6時までの間を四等分して時間帯として用いていた。つまり第4の区分である午前3時から6時までの間を指す。**彼らの方へ行かれた** イエスは弟子たちを見捨てられることは決してない。山での祈りを終えられると、イエスは弟子たちの方へと歩みを進められるのである。あるいはイエスは困難に直面した弟子たちを助けるのに最も良い時を知っておられたのであろう。

26 **幽霊** この言葉は当時のユダヤ人たちには至極一般的なものであった。この言葉はいかなる幻影にも用いられていた。**おじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた** 「おじ惑い」「恐怖」「叫び声」といった同種の言葉が繰り返されており、弟子たちの驚きがどれほど大きかったかをよく表している。なお、イエスの現れに対して弟子たちがイエスを見分けることができなかったのは、エマオでの顕現(ルカ24・13)、テベリヤ湖での顕現(ヨハネ21・4)においても見られる。

27 **わたしである**(ギエゴ・エイミ) 直訳は「わたしこそ」。神の自己啓示の言葉であって、ご自身を旧約聖書のヤーウエと同一視された言葉である(出エジプト

3・14、イザヤ書43・10）。このイエスこそ生ける神であつて、風と波との支配者であるとの宣言の言葉である。恐れることはない 直訳は「恐れることをやめなさい」となる。

28 この箇所から後の言葉は、並行記事であるマルコやヨハネにはない。マタイ独特の箇所である。主よ、あなたでしたか 新改訳聖書では「主よ、もしあなたがたでしたら」と疑問形で訳している。しかし、この呼びかけは、前節の「わたしである」に対応しての「あなたなのですから」(直訳)という全能の神、自然の支配者への呼びかけの意図が込められていると考えられる。

29 おいでなさい イエスの答えはこの一言のみである。しかし、主の弟子にとってはこの一言だけで充分であった。

30 風を見て それまでのペテロは、ただイエスのみを見ていたということの裏返しとしての言葉。主よ、お助けください 天の御国の民にとっては最も大切な言葉である。

31 信仰の薄い者 イエスはここで「信仰がない」とはおっしゃらなかった。「信仰が薄い」のであって、「信仰

が少ない」「信仰が足りない」という意味である。信仰とは、主と主の言葉に信頼することであり、ここではイエスの「おいでなさい」という言葉のみを頼りにして、主から目をそらさずに歩むことであった。信じつつも信じきれない弱い弟子の姿がここに表れている。疑ったギリシャ語の原意は「二つに分かれる」である。一方では信じつつも、他方では嵐に氣をとられて心が二つに分かれてしまうことである。

33 マルコにはこの弟子たちの告白は省略されている。弟子たちは同様の経験をすでに8・23〜27においてしていた。しかし、五千人の給食の奇跡とこの出来事によって、彼らの告白はイエスを「神の子」として礼拝するまでに至った。まさにこの個所の中心は、イエスが誰であるかということを示しているのである。

参考図書 D・R・A・ヘア『マタイによる福音書(現代聖書注解)』、デイヴィッド・ヒル『マタイによる福音書(ニューセンチュリー聖書注解)』(いずれも日本基督教団出版局)他。

## 聖書

マタイ14・22〜33

## タイトル

嵐を静めたイエス様

しっかりとするのだ、わたしである。恐れることはない。

マタイ14・27

## 目標

人生の逆風の中でもキリストを見上げ、信仰を持つて前進する。

## 導入

(松浦みち子)

皆さん、人の一生には、三つの坂があるとわれているのを知っていますか？ 一つは登り坂、一つは下り坂、もう一つはまさかの坂です。勉強やスポーツを一所懸命している時は登り坂、やる気がなくなったり、悩んだりする時は下り坂、思わぬ事故や怪我に出会う時はまさかの坂。このように、一生の間いろいろなことに出会いながらわたしたちの人生は過ぎていくのです。イエス様の弟子たちもそうでした。今日は弟子たちがまさかの出来事に悩まされるお話です。

## あらしの湖

イエス様は5つのパンと2匹の魚で五千人以上の人々

のお腹を満腹させました。弟子たちは自分たちがすばらしいイエス様の弟子であることを誇らしく思い、喜びに満たされていました。ところが、そんな弟子たちをしいて舟に乗り込ませ、向こう岸に先に行くよう命じられました。そして、ご自分は大勢の人を解散させてから、ひとり祈るため山に登って行きました。夕方になってもまだ山で祈っておられました。弟子たちを乗せた舟はもうすでに岸から離れ向こう岸に進もうとしますが、逆風が吹いてきてこぎ悩んでいました。ペテロやヨハネなど元漁師もいましたが、どうすることもできません。一晩中、彼らは波に悩まされ木の葉のように揺れる舟にしがみつきながら「舟が沈んだらどうしよう」と震えていました。

## 弟子たちを励ますイエス様

明け方4時ごろ、イエス様は海の上を歩いて彼らの所に行かれました。弟子たちは、薄暗い湖の上を歩く姿を見て、「何だ、あれは！」「幽霊だ」と恐怖におそわれ叫び声をあげました。ガタガタ震える弟子たちに「しっかりとするのだ、わたしである。恐れることはない」と声

をかけられました。するとペテロが「イエス様、わたしに命じて水の上を渡ってお側に行かせてください」と言う。「来なさい」と言われたのでペテロは舟から下り、水の上を歩いてイエスの所に行きました。しかし、一瞬風を見て、恐ろしくなり、溺れかけ「主よ、助けてください」と叫びました。すぐに、イエス様は手を伸ばして彼を助け「信仰の薄い者よ、なぜ、疑ったのか」と不信仰をたしなめられました。ペテロとイエス様が舟に乗り込むと、たちまち風はやんでしまいました。

### イエス様を仰ぎ見る

舟の中からこの様子を見ていた弟子たちは、イエス様を拝して「ほんとうに、あなたは神の子です」と信仰告白をしました。

イエス様は、これらの出来事を通して、弟子たちを訓練なさったのです。パンの奇跡を見て、イエス様のなさったことを体験したにもかかわらず、イエス様が神であり、イエス様にとって不可能なことはひとつもないということをもまだ悟ることができませんでした。このような弟子たちを訓練するため、嵐の湖にあえて送り出し、

ご自身はひとり山でとりなし祈っていただくのですね。何という深い愛のご配慮でしょう。弟子たちは、命の危険にさらされながら、自分の無力さに気づき、イエス様を心から信じる者に変えられたのです。

今、悩みの中にいるお友達がいますか？ あなたは何をしてもうまくいかないなあと思ってしまう感じがしていますか？ でも、大丈夫です。「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と一人ひとりにみ声をかけてくださるイエス様を信じ、仰ぎ見ましょう。

また、どんな事でも「主よ、助けてください」と祈るとき、主は折にかなう助けを与えて下さるお方です。

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように訓練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル4・15～16）。

♪ただひとり♪（ホ92）



# 聖書 マタイ15・21〜28 テーマ 見あげた信仰

## 序論

(山田和幸)

イエスがその公生涯で唯一外国にまで足をのびされた時、不信仰な弟子たちとは対照的に、立派な信仰の異邦人の女性との出会いがありました。

## 一、切なる求め

ユダヤ人は異邦人との接触によって宗教的に汚れることを恐れていました。ユダヤからガリラヤに行くのに、近道であるサマリヤを避けてわざわざ山地を行くのと同じで、フェニキヤ人の地に足を踏み入れることはありませんでした。

ユダヤ人との交わりがほとんどなく、ギリシヤ文化の影響を強く受けているフェニキヤの「カナンの女」が、イエスを「主よ、ダビデの子よ」と呼び、あわれみを請うたのは驚きです(参照8・25、9・27)。この言葉は、ダビデ王国の救い主の意味を知り、異邦人もその恵みに与<sup>あずか</sup>れることを知っている人の表現だからです。

娘が悪霊に取りつかれているという悩みを抱えていたこの女は、一縷<sup>いちろ</sup>の望みをかけてイエスについて調べ、救い主としてのイエスに期待して訪ねてきたのでしょう。イエスが密かに行かれたにもかかわらず、彼女は見つけだして訪ねてきました。そして、イエスに「主よ、ダビデの子よ」と呼びかけました。イスラエルの真の王、救い主としてのイエスをすでに知っていたのです。

人は苦しみの中でこそ、まことの神様を求めるものです。この女性もそれ故にイエスに出会うことができたのです。

## 二、信仰の成長

イエスの態度は、一見つれなく見えます。まずはじめは、無視されました。実は、イエスはこれまで、求める者を拒否したことがありませんでした。だから、弟子たちは違和感を覚えながら、イエスにはつきり応答するように提案したのです。次にイエスは、まるで拒否しているように見える言葉を発します。しかし、イエスはこの女性の信仰が本物になることを期待しておられたのです。さらに、「子供たちのパンを取って小犬に投げてや

るのは、よろしくない」という言葉に、軽蔑<sup>けいべつ</sup>の語感はありません。この女性の信仰を引き出すために、ユーモアを持って柔かく拒否されただけです。冷たく突き放す言葉ではないのです。新約聖書で、「犬ども」とは異邦人の蔑称<sup>べつしやう</sup>ですが、「小犬」とはペットのことです。「ペットより家族が先ですよ」というニュアンスです。だからこそ、彼女はイエスの言葉を受け入れつつ、食い下がることでできたのです。そして、その信仰告白はイエスに認められたのです。「その言葉で、じゅうぶんである」（マルコ7・29）と。

イエスは、すぐに求めに応じないことでこの女性の信仰を引き出し、その上で願いに応えられました。私たちなら、どう応答するでしょうか。この女性のように、謙遜な信仰で食い下がる事が出来るでしょうか。

### 三、見あげた信仰

〈女よ、あなたの信仰は見あげたものである〉と、イエスにほめられた信仰とは何だったのでしょうか。「信仰が大きい」（28節、直訳）というイエスの言葉は、信仰が小さい弟子たち（8・26、14・31、16・8）と対照的で

す。何度もとがめられている弟子たちとは違って、絶賛の響きがあります。実は、イエスに信仰をほめられた人は多くありません。この女性と、百卒長に対しての二回だけです（マタイ8・5・13）。

この女性は、①どこまでも謙虚な姿勢で神の恵みを求め、②イエスの言葉を素直に受け入れ、③イエスの譬えに信仰による理解力をあらわしました。そのような信仰が、「見あげたもの」とイエスに認められる信仰なのです。

### 結論

私たちも、熱心に主の恵みを求めながらも、〈主よ、お言葉どおりです〉と、すべてを委ねた謙遜な信仰を目指しましょう。〈ダビデの子〉とイエスの本来の姿<sup>ゆた</sup>を認め、「小犬」と自らをへりくだり、娘<sup>いや</sup>が癒されたのを見ないでも信じた信仰です。神様はそのような信仰者を、今も求めておられるのです。

そして、そのような信仰に進む者は、神様の御業を経験することができるのです。

「そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた」（マルコ7・30）。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

21 **そこ** この言葉には、マタイは2つの意味合いを求めていると考えられる。まずは地理的意味での「そこ」であって、具体的にはカペナウムであろうと考えられる。しかし、それ以上に、マタイはこの個所に別の意味合いも込めている。すなわち、前節までの流れから、ユダヤ教指導者や押し迫る群衆を避ける目的から異邦人の地へと足を運んだこと、またやがて福音が全世界へ広がっていくことの暗示としての意味をもたせている。**ツロとシドンとの地方** ツロはイスラエルのガリラヤ国境から20キロメートル北方にある海港都市。シドンはツロのさらに北にある都市。これらの町々は、旧約聖書では罪深い町々とされており(イザヤ23章)、ユダヤ人にとってはメシヤがその町で祝福の言葉を告げるなどということは考えられないことであった。イエスもパレスチナの地方から出られるのは後にも先にもただこの時だけである。

22 **その地方** ツロとシドンとの地方。**カナン** マルコはこの言葉を「スロ・フェニキヤ」と述べている。昔、

イスラエルの民がエジプトから脱出してパレスチナの地方へとやってきたとき、そこにいた先住民族である。カナンとイスラエルとは仇敵関係きうてくけいにあった。したがって、カナンの女がイエスに助けを求めたことは通常ありえないことであった。それほどまでにこの女性は助けを必要としていたことの証拠であり、このことは、**叫びつづけた**(直訳すると「金切り声をあげて叫び続けた」となる)ことの中にもうかがえる。**ダビデの子** この表現はユダヤ的表現であり、メシヤの称号として用いられていた。ここで異邦人であるカナンの女がイエスに対してこの称号を用いたことは、少なくともこの女性はイエスをメシヤと信じていたことを表している。このことは驚くべきことであり、つまりきを乗り越えて熱心にイエスに救いを求めたことの証拠である。

23 **ひと言もお答えにならなかった** イエスのこのような沈黙は、他の個所にはない。しかし、この沈黙は、この女性が異邦人であるからというのではなく、この女性の信仰を試されるがゆえのイエスの意図が見て取れる。**この女を追い払ってください** 弟子たちのこの言葉をどのように理解するかは諸説ある。この女性を断つて帰す

ようにともとれるが、この物語の状況から考えるとこの女性の願いをかなえて帰すようにとの弟子たちの願いである。

24 イエスは前節の沈黙を突然破られ、この女性をさらに突き放す言葉を発せられる。**イスラエルの家の失われた羊** 「イスラエルの羊」とは、イスラエルの民という意味であり、イエスは10・6において、弟子たちを宣教に派遣するに当たってこの表現を用い、契約の民であるイスラエルの民以外のところには行かないようにと命じられた。

25 前節のイエスの冷たい言葉に対しても、この女はあきらめなかった。

26 この節も、私たちに戸惑いを与える個所の一つである。というのは、イエスがカナンの女を「小犬」扱いしたからである。当時、ユダヤ人は異邦人を「犬」と呼んでいた（イザヤ56・10）が、それは異邦人に対する差別的な表現であり、イエスまでもが異邦人を差別的扱いするのか、ということである。しかし、イエスが最後にこのカナンの女に対してとった態度から、「小犬」という言葉は差別的表現としてではなく、ユーモアのセンスに基

づいた表現であったと言える。**子供たち** ユダヤ人のこと。**小犬** 異邦人のこと。**パン** イエスが与える祝福のこと。

27 前節のイエスの拒絶の言葉にもかかわらず、**なおもこの女はあきらめることも怒ることもなかった。むしろ、主よ、お言葉どおりですと、まずイエスの言葉を受け入れた。**同時にこの女はさらに食い下がる。この言葉の中には、自らを **小犬** であると認める謙遜さ、また何としてもそのおこぼれにあずかりたいという必死さが表れている。

28 この女は、イエスの再三のテストに見事にその信仰をもって答えた。**あなたの信仰** 原文では「あなたの」に強調点がおかれている。これは、ユダヤ人ではなく異邦人のあなたの信仰、と訳せる言葉である。ちなみにマタイにおいて、その信仰がほめられている人物は、この女性と百卒長（8・10）であり、いずれも異邦人である。**見あげたものである**（ヘメガレー）非常に大きい、あるいは「すごい」という意味。

**参考図書** 中澤啓介「マタイの福音書註解」（いのちのこ とば社）他。

## 聖書

マタイ15・21〜28

## タイトル

見上げた信仰

## 暗唱聖句

女よ、あなたの信仰は見上げたものである。あなたの願いどおりになるように。

マタイ15・28

## 目標

謙遜でありつつ大胆な信仰によって祈る者となる。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんはお祈りする時、ひとつのことを何度も、答えられるまで祈りますか？ 一度や二度お祈りして答えられなかった時、「なあんだ、神様、ちっともきいてくれないや。もう、お祈りするのやめよっと！」と、お祈りをやめてしまふことはありませんか？ お祈りの答えには三つがあることを心に覚えましょう。信号を思い浮かべてごらん下さい。青・黄・赤と三つの色がありますね。青は「すすめ」黄は「待つて」赤は「止まれ」ですね。お祈りも青「いいですよ」とすぐに答えられるもの、黄「ちよっと待つて下さい」と忍耐して祈り続けるもの、赤「だめです」と願っていることが間違っていて答えられないもの、があります。毎日

の生活の中でこのことを心にとめて祈りましょう。

## イエス様に助けを求める女

イエス様がツロとシドンの地方に行かれた時のことです。一人のカナン人の女の人が、イエス様のところに叫びながら近づいてきました。「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれ、苦しんでいます」。この人は、娘のために今までいろいろなことをしてみただけでしょう。けれども、どんな医者も薬も娘を治すことができなかったのです。そのような時、イエス様のうわさを聞き、イエス様なら娘を治してくださいにちがいないと思って、「主よ、ダビデの子よ」と叫んだのです。ところが、イエス様は一言もお答えになりません。女の人は、ますます声を大にして「イエス様、わたしをあわれんでください」と、しつこいばかりに叫び続けます。イエス様の弟子たちも困ってしまいました。「イエス様、何とかして、このうるさい女を追ひ払ってください。叫びながらついてきていますから」。でも、イエス様は黙って歩いていらっしやいます。いつも優しいイエス様なのに、どうなさったのでしょうか。

## あきらめない信仰の女

ついにイエス様が口を開かれました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。なんだかイエス様らしくない冷たい感じがします。けれども、決してイエス様は、イスラエル人でないこの女の人を差別したのではなくありません。この女の人の信仰が本物であることを確かめるために、わざと冷たくされたのです。この女の人も、つっぱねられても一歩も引き下がりません。さらに熱心に「主よ、わたしをお助けください」と叫びます。けれどもイエス様は、「子供たちのパンを取って、小犬に投げてやるのは、よろしくない」と言われるではありませんか。小犬扱いするなんてひどい、と思うかもしれませんね。けれどもそうではないのです。「小犬」というのは可愛がっているペットのことです。子供たちの次には、ちゃんとパンくずをもらえなのです。それでもペット扱いはいい気分はしません。が、ここでもイエス様はこの女の人の信仰を確かめようとされたのですね。するとどうでしょう、この女の人は、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」と答えたのです。

## 信仰をほめられた女

イエス様はこの答えを待っておられたのですね。もとの優しいイエス様に戻られて、「あなたの信仰は見上げたものである」とこの女の人をほめました。そして、「あなたの願いどおりになるように」と、娘を癒<sup>い</sup>されたのです。なぜイエス様はこの女の人の信仰をほめられたのでしょうか。一つは、イエス様を神の子と信じ、この方なら必ず治してくださるという、あきらめない希望に基づく信仰でした。二つ目は、自分の弱さを認めるへりくだった信仰です。小犬がパンくずをもらわないと生きられないように、自分もまたイエス様に頼らなければならぬ弱くて小さな者だということを、この女の人は認めたのです。三つ目は娘を愛する愛に基づく信仰です。悪霊につかれ苦しんでいる娘の痛みを自分の痛みとして受け止め、なりふり構わずイエス様に近づきました。この人の信仰は、愛に基づく、神様が喜ばれる信仰でした。私たちも、この女の人のように、自分の罪深さを認め、熱心に大胆な信仰をもって祈りましょう。どんなにたらい中でも、必ず主は助け、道を開いてくださいます。

♪神さまのみくには♪（ふ33、ホ75、イン104）

# 聖書 出エジプト2・1～10 テーマ モーセの誕生

## 序論

(金井信生)

やがてイスラエルの民をエジプトから導き出す指導者として用いられるモーセですが、その誕生の時から人知を超えた神の救いの手が働いていました。また、危機の中で信仰を働かせた人たちがいました。

## 一、危機の中でただ主に委ねる

創世記の最後に、エジプトに移り住んだヤコブの子孫は大いに増えました。これを恐れた新しい王は、ヘブルびとを奴隷として苦しめました。それでもヘブルびとは増え、非常に強くなりました。そこで、王は生まれてくるヘブルびとの男の子はナイル川に投げ込むように命じました。その状況の中でモーセは生まれました。

両親は生まれた男の子を救う決心をし、「信仰によって」(ヘブル11・23)三カ月の間、隠していましたが、成長するにつれて隠しきれなくなりました。

男の子はパロの命令に従ってナイル川に連れてこられ

ました。ただ、両親は子どもを主の手に委ね、パピルスで編んだかごに入れて、葦の茂みに置きました。

〈かご〉と訳されている言葉は、ノアの洪水の「箱舟」と同じ言葉です。動力も舵もたず、ただ流れに任せるままの乗り物です。しかし、ノアもモーセの両親も信仰をもって、最善をなされる主の手にすべてを委ねました。またノアが鳩を放つて確かめたように、ここでは、モーセの姉がこの男の子がどうなるのかを見守っていました。

## 二、危機の中に備えられた救いの道

そこに王女(パロの娘)が身を洗うために、川に降りてきました。そしてかごと、その中の子どもを見つけました。顔つきで分かったのか、身を包んでいた布の柄やデザインで気づいたのか、王女はその男の子がヘブルびとの子であることに気づきました。

王女もパロの命令は知っており、〈かわいいそうに〉思ったところに、モーセの姉が近寄って〈あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか〉と声をかけました。



まだ王女は、その子をどうするか決めていませんでしたが、もうすでにその赤ちゃんの責任を王女が持つていくのかのような声掛けに、王女は決心してその言葉に従いました。

王女が川に降りてきたタイミングと、そのあわれみの心を主は備えておられました。また、見守っていた姉に、恐れないで王女に声をかけ最善の言葉を口にする知恵を与えられたのも主です。両親から始まって、危機の中でも危機を恐れず主を畏れる<sup>おそ</sup>人が、祈り決心して行動する時、主はまことの神を知らない者をも思わぬ協力者として用い、救いの道を備えてくださいます。

### 三、危機を祝福に変えられる主

バロの命令は、エジプト中のすべての民に向けられていましたが、王女は従う必要がありませんでした。結果、男の子はモーセと名付けられて、宮中での教育と訓練を受けることができ、やがてイスラエルの民を率いるのに役立てることができました。

また、幼少時に母のもとで育てられたことにより、主を畏れる信仰の土台が据えられました。ナイル川に流さ

れて終わるはずだった赤ん坊の生涯は、主の不思議な手によって、信仰の基礎と最高の教育を与えられることになりました。

私たちも時に危機的な経験をすることがあります。しかし、イエス様を信じ救われたこと自体が、最大の危機から主の恵みによって救われた経験だったのです。スポーツなどで、「失うものは何もない」と挑戦していく言葉を聞きます。私たちも恵みによって救われ、生かされた者であることをおぼえて、危機の中で主に委ね、また知恵と勇気を与えられて、大胆に主の道に歩むことができるのです。

### 結論

モーセを水の中から引き出された主は、私たちも罪と滅びの中からすでに救い出してくださいました。なお危機を感じることがあっても、その中で神の守りと助けを経験する者となりましょう。



## 研究資料

(小平德行)

へブル人に生れた男の子をナイル川に投げ込めとのパロの布告はイスラエルの全滅を意味した。これに抵抗する手段は人間的にはないように思われた。まさにイスラエルは危機を迎えたのであるが、その中で信仰によって歩んだ両親がいた。イスラエルの指導者モーセは、この信仰の中で生かされ、育てられたのである。

## テキスト

1 レビの家のひとりの人 出エジプト6・20によれば、これはアムラムであり、**レビの娘** とはヨケベデである。

2 その麗しいのを見て ステパノはモーセについて「まれにみる美しい子であった」(使徒7・20)と表現している。ここは新共同訳では「神の目に適った美しい子」としており(新改訳も類似)、こちらの方がギリシア語本文に即している。両親は信仰によって、この麗しさは神がこの男の子に特別のご計画を持っておられるしであると感じた。生きた信仰をもっている時、非常に小さな手がかりから神の顧みを信じ、勇気を得ることができる。**隠していた** この行為は、単に親としての情から

なされたものではなく、神は、この子を顧みてくださるという信仰、さらには、神はご自身の民を必ず守られるという約束に対する信仰による行為であった(へブル11・23)。彼らは「王の命令をも恐れなかった」(同)のである。たとえ危険が伴っても、信仰は行動という結果となって表われる。

3 もう隠しきれなくなったので 3ヶ月になった健康な赤ん坊の泣き声は大きいため、これ以上隠すことは不可能になった。ヨケベデは「ナイル川に投げこめ」というパロの命令の通りにしたが、できる限り生き延びることでできる手段を取った。**パピルス** 茎高約2メートルで葉は毛髪のように頂上に固まって生じる。この茎を編んで、防水のためにアスファルトを塗って舟造った。**かご**(ヘーバー) 創世記6・9章の「箱舟」と同じ言葉。**ナイル川の岸の葦の中においた** おそらく浅瀬であり、かごが流されることがなく、また何もない岸部よりはワニなどに襲われる危険が少ない場所であった。

4 その姉 ミリアム(民数記26・59)。事の成り行きを見守っていたのは母親でなく姉であった。この時母親は、自分の子を完全に神にゆだねていたのである。

**5 身を洗おうと** 古代エジプトでは、神聖なナイル川で水浴びすることは、身を清めるだけでなく、寿命を長くすると信じられていた。

**6 かわいいように思っ**て パロの娘が王の命令にもかかわらず、ヘブル人の子にあわれみの情を抱いたのは女性特有のこまやかな愛情、本能的ともいえる母性愛のゆえであろう。しかし何より、神の御力が暴君の近くににいる人々の心に、善意と柔かな愛を置いたのである。古代エジプトの王女は非常に権勢があつて、王の命令にもかかわらず、ヘブル人の男子を王子のように養育することができたのである。彼女は無意識のうちに神の救いの御計画に参与することになった。

**7-9 モーセの姉は、**パロの娘が赤子にあわれみの情を抱いたことを知ると、神からの知恵と勇氣を持つて、間髪を入れずに乳母を呼んでくることを申し出た。**わたしはその報酬をさしあげます** 母親は自分の子どもを十分な賃金をもらつて育てることになった。しかもエジプト王家の庇護のもとにあつて、迫害のさなかにも安全に育てることができるようになったのである。後年、モーセはエジプト王家の一員としての扱いを受けながらも、

ヘブル人としての民族感情に燃え、ついにエジプトを向こうに回して戦うようになった。それは、幼い頃ヘブル人である母親ヨケベデに育てられた事が、大きく影響していたと考えられる。この個所には「神」という言葉は出て来ないが、エジプトにおけるイスラエルを深く顧みられる神の御手が背後にあることを強く感じさせる。

**10 モーセ** (ハ)モーシエ ここではモーセの名の由来について、パロの娘が水の中から「引き出した」(ハ)マリーシャという語呂合わせから説明されているが、そのモーセは自分の民をエジプトから「引き出した」者でもあつた。この名についてはエジプト語を考慮して、「生む」とか「子」を意味する「メス」に由来するという見方もある。

**参考図書** 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約Ⅰ』

(いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇Ⅰ』(イムマヌエル綜合伝道団)、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)他。

## 聖書

出エジプト2・1～10

## タイトル

必ず助けてくださる！

## 暗唱聖句

信仰によって、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ彼を隠した。

ヘブル11・23

## 目標

危機の中で、信仰によって神の助けを求める。

## 導入

(飯田勝彦)

私たちはよく「今週も信仰によって歩みましょう」と聞きますね。「信仰、信仰って言うけど、どういうこと？」と思ったことありませんか。信仰とは神様を信頼すること、神様を頼りにして行くことです。神様を頼りにして歩むことは、私たちの力となり支えになります。また、神様を信頼して歩む人に、神様は不思議なことをしてください。

## パロのひどい命令

さて問題です。ピラミッドで有名な国はどこでしょうか？「そう、エジプトです！」。今から、約四千年も前にイスラエルの人々は、エジプトに住んでいました。彼

らには、次々とたくさん赤ちゃんが生まれ、イスラエル人の数が増えていきました。すると、エジプト王パロは、イスラエルが国を奪うかもしれないと恐れたのです。そこで、パロが考えたことは、イスラエルの人々を苦しめることでした。彼らを奴隷として扱い、苦しい労働をさせました。でも、イスラエルの人々の人口は減るどころか増え続けていきました。それを知ったパロは助産婦に「イスラエルの人々に男の赤ちゃんが生まれたら殺せ！」と命令を出します。でも、この助産婦たちは皆、神様を畏れていたのでパロの命令に従いませんでした。パロは次に「ヘブル人に男の子が生まれたら、みなナイル川に投げこめ」とすべての民に命令しました。イスラエルの民は、パロのひどい命令によって、危険な中に追い込まれてしまいました。

## 神様への信仰

そんな中、レビ人の夫婦の間に可愛らしい男の赤ちゃんが生まれます。それがモーセです。この夫婦はパロの命令を知っていました。もし皆さんが、この両親だったらどうするでしょうか。命令に従わなければ子どもだけでなく、自分たちも殺されてしまいます。

モーセの両親は悩んだでしょう。でも、彼らはパロの命令に従わず、モーセを三ヶ月間も隠しました。それは、非常に危険なことでしたが、両親の神様への信仰から来るものでした。両親は、神様が必ずモーセと、イスラエルの民族を守ってくださることを信じたのです。モーセの両親は、「今日もこの子を守ってください！」と必死に神様に祈ったに違いありません。

モーセは、両親の神様への信仰と愛によって、すくすくと育って行きました。泣き声も大きくなり両親は、もうこれ以上隠しきれなくなり、モーセをかごに入れて川岸の葦の茂みに置いたのです。両親にとって子どもを手放すことは、辛いことだったに違いありません。でも、彼らはすべてを最善にしてくださいと神様の御手に我が子を委ねたのです。ここにも両親の神様への信仰がありました。

信仰とは、神様への信頼です。私たちはどうでしょうか。

### 神様の助け

川に置かれたモーセの様子をそっと見ている人がいました。モーセのお姉さんです。姉が見ているとパロの娘

が水浴びのために川に降りてきました。すると、娘はかごに入れられたモーセに気付きました。「モーセが殺される!」モーセの姉の心が騒ぎます。しかし、パロの娘はモーセのことをかわいそうに思い、助けました。その時、モーセの姉がパロの娘に近寄り「モーセにお乳を与える女性を紹介しましょう」と声をかけました。すると、パロの娘はすんなりとそれを受け入れました。そのことによってモーセは助けられただけではなく、実の母親からお乳を受けることができたのです。そして、大きくなるまで両親のもとでモーセは育てられました。

神様は、両親の神様に対する信頼を裏切ることとはされませんでした。やがてこのモーセがイスラエルの民を救うリーダーとなるのです。

### まとめ

私たちの生活の中でも「これはどうしよう。困ったなあ」という事があります。その時にこそ、モーセの両親のように私たちを助け見守ってくださいと神様に信頼してください。神様は不思議なようにあなたを助けてくださいます。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)

# 聖書 出エジプト12・1～14 テーマ 過越

## 序論

(金井信生)

主がエジプトに下された十の災いの最後は、どんな身分の家庭も、また家畜も含めて、ういご（初子）が一晚のうちにみな死んでしまうというものでした。その結果、パロはついにイスラエル人を自由にしました。この出来事は、キリストの十字架によって罪と死の力から救われる予表です。

## 一、救いの時

これまでの災いを通して示されてきたように、主は災いを通してご自身の存在と力をあらわされました。人間が時におごり高ぶって何でもできるように思うことがあります。自然の力や社会の波を通して、無力さを知り、本当に確かなものや頼ることのできるお方を求めます。主がここで下された災いも、滅ぼすことが目的ではなく、主の声に聞き従う民を起こすためです。

最後の災いも、起ころうとする出来事と共に、どうす

れば免れることができるかを主は示されます。同じ出来事が、主を畏れ<sup>おそ</sup>ない者にとっては裁きの日、恐怖の日となり、主に従う者には救いの日となるのです。

かつて台風は突然来るものでしたが、今は予報が出ます。外れることもあります。知らされている方が幸いです。主の言葉は必ずその通りになるのですから、聞き従わなければ、自分から被害を受けることになります。

## 二、救いの条件

最後の災いは「主の過越」と呼ばれています。エジプトのすべてのういごを打たれた主が、イスラエルの民の家だけは、害を与えずに通り返されました。その区別は、家の中をのぞいたからでも、人の心を調べたからでもなく、家の入口の二つの柱ともいに血が塗られているかどうかだけでした。

家ごとに小羊が殺され、その血が戸口に塗られていきます。自分たちが守られるために、代わって犠牲となった小羊によって救いもたらされました。この一切は、主が示されたとおりに行ったからです。

出エジプトの際は、ういごだけが死ぬという災いでし

たが、私たち誰もが、最後は死ぬことにおいて、最大の災いを逃れることはできません。しかし、死ぬことに對しても、主が約束された条件を守り行えば救われます。罪を悔い改めてイエス・キリストの十字架の死を自分の罪のためと信じ、受け入れれば、私たちは死の恐れから解放されて、主に守られて生きる恵みをいただくことができますのです。

### 三、キリストの救い

小羊の犠牲によって、イスラエルの民は救われました。新約聖書は、イエス・キリストを「神の小羊」と繰り返し伝えていきます。洗礼者ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1・29)と弟子に証します。ペテロは「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血」(1ペテロ1・19)によって、わたしたちはあがない出されたと記します。何よりもイエス自ら十字架にかけられる前の晩に弟子たちと食事を共にされ、ぶどう酒を「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」(ルカ22・20)と宣言して渡されました。

私たちはきよい神の前に、本来ならば罪ある者、裁かれるべき者でした。しかし、神の独り子であり、全く罪のないイエス・キリストが、私を愛し、私の代わりに、命を差し出し死んでくださいました。私たちは、自分で用意した小羊ではなく、神が備えられた清い御子キリストの血によって、罪が赦され、救われました。キリストによる罪の赦しとは、神の前に、キリストの義が私の義となったことです。神は、イエス・キリストを信じ受け入れた私を前にして、(わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであろう。：あなたがたを滅ぼすことではないであろう)と宣言してくださるのです。

イスラエルの民は、今に至るまで毎年、この過越を記念する祭りを行っています。私たちはそれ以上に日々イエス様の十字架の救いを喜び感謝し、「キリストによって私は救われました」と、大胆に主の前に近づき、御名をほめたたえて歩みましょう。

### 結論

キリストの血により罪赦されたことを感謝し、神の裁きから守られていることを喜びましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

過越の出来事はイスラエルの歴史においても、後のキリストによる救いの型を示している点においても非常に重要である。

## テキスト

2 この月をあなたがたの初めの月とし この出来事はイスラエルの歴史において非常に重要なものであったので、特別に霊的な意味において「初めの月」とする必要があった。日常の暦では、おそらく第七の月であったと思われるが(エジプト暦では第十か第十一の月となる)、過越と出エジプトという重大な出来事を記念して、この日がイスラエルのために特別な意味を持つようになった。この時以来、イスラエル人は宗教暦と民事暦の二つの暦を用いるようになった。この月はまた「アビブの月」とも呼ばれる(出エジプト13・4、申命記16・1)。「アビブ」とは「穀物の穂」を意味し、この月はちょうど穀物が穂を出す頃で、太陽暦の4月頃に相当する。バビロニア捕囚の後、この月はバビロニアの習慣に従って「ニサンの月」と呼ばれるようになった(ネヘミヤ2・1、

エステル3・7)。

3 全会衆(ハ)コル・エーダー) イスラエルを表す宗教的用語。新共同訳は「共同体全体」と訳している。エー

ダーはカーハールと共に、新約における教会(ギ)エクレシア)のもととなった用語。小羊(ハ)セ) は羊または山羊の両者に用いることができる。それゆえ5節では「羊または山羊のうちから、これを取らなければならぬ」と説明されている。

4 おのおの食べるところに応じて 後代になると、一頭の山羊を食べる人の数は10人と定められるようになった。これはユダヤ教による人工的規定であって、実際にはそれぞれが食べられる分量に応じて人数と分量を定めればよかった。

5 傷のない(ハ)ターミーム) この語はレビ記の祭儀律法の中で多く用いられており、身体に欠陥のないことを意味する。また、人についても用いられ、「全き人」「全き者」と訳されている(創世記6・9、17・1)。この場合には「神に全く従う」という意味に用いられる。過越の小羊はキリストの型で(1コリント5・7)、傷のない、完全無罪のキリストがその血を流されたことに



よって贖い<sup>あがな</sup>が完成した。

7 その血を取り、…塗らなければならない この血を塗る行為は、ヒソブの束を用いて行われた(22)。ヒソブはきよめの行事に関連してのみ用いられる(レビ14・49(52)ので、この行為は、きよめと贖いの儀式に関連している。

8-10 ここは食事について具体的に指示されている。火に焼いて食べ 生で食べることや、水で煮て食べることが禁じられている。生で食べることは、当時、そのような古代の風習が残っていたか、あるいは異邦人の魔術的な行為の中にこうした風習が残っていたことを示しているのかもしれない。水で煮ることを禁じているのは、イスラエルの各家庭には羊一頭を丸ごと煮ることの出来る大釜はなかったから、煮るために動物の体を小さく切ってしまうことがないようにという配慮だったかもしれない(46)。過越しの時に一つのパンから食するように(1コリント10・17)、小羊もその体のまま食卓に供された。それは主にある者が一つ心になって交わることができるようになるための象徴的な行為である。種入れぬパン パン種を入れたパンは腐敗しやすかった。そ

れは道徳的腐敗を象徴しており、悪意と邪惡の型でもあったので(1コリント5・8)、ささげ物のパンはパン種を入れて作ることが禁じられた。苦菜 エジプトにおける苦難を表したものの。「ミシユナー(ユダヤ教の中で最も初期に成文化された口伝承)」には苦菜にする草として、チシャ(レタス)、キクチシャ(チコリー)、コシヨウグサ、ヘビノネ、タンポポの5種類が挙げられている。

11 腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない いつでも出立できる身なりをして食すること、緊迫した雰囲気がよく表されている。後代になると、自由の民であることを表すため、ゆつくりした雰囲気の中で食するようになった。過越(ヘペサハ) 文字通りには「跳躍する、飛び越す」を意味し、ここから「通り越す、容赦する」という意味をもつようになった。

13 その血は…しるしとなり 家の入口とかもいに塗った血が、神のさばきより免れるしるしとなったように、私たちも神と人の前にキリストの血に対する信仰を言い表わす時に救われる。

参考図書 10月19日分と同じ。



## 聖書

出エジプト12・1～14

## タイトル

神様に守られて

## 暗唱聖句

わたしはその血を見て、あなたがたの所

を過ぎ越すであらう。出エジプト12・13

## 目 標

キリストの血により罪赦され、神の裁きから守られる者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

「あんな酷いこと言ってごめんね」、「いいよ。もう気にしていないから。これからも仲良くやろうね」。皆さんは、仲良しの友だちとけんかしたことがあるでしょう。仲が悪くなると何だか学校に行くのも嫌になることがあります。でも、素直に友だちに謝って赦してもらうと嬉しいですよ。皆さんは、自分が悪かったことを赦してもらったこととてありますか。人を愛することは、言葉を変えれば人を赦すことです。今日、神様が皆さんをどんなに愛してくださっているかが分かります。

## 苦しむイスラエル

神様はイスラエルを祝福され、どんどん人数が増えて行きました。でも、彼らは長い間、エジプトで奴隷とさ

れていました。ギリギリと太陽の照りつける中で彼らは、レンガ作りの強制労働をさせられていたのです。奴隷とは、誰かに支配されていて自由がなく、苦しみの中にある人です。皆さんは、誰かの奴隷にされて苦しんでいる人はいないでしょう。でも、罪の奴隷になっていないでしょうか。自分では「心の優しい人になりたい」とか「悪いことはしない」と思っているけれども、心の中ではいつも誰かの文句を言ったり、実際に友だちと一緒にあって悪いことをしたりしていませんか。自分ではしたくない悪いことをしているとすれば、それは罪の奴隷になっています。

## 救われたイスラエル

苦しむイスラエルの民を、神様は見放しておられませんでした。イスラエルの民を救うため、まずモーセを選ばれました。そしてモーセがエジプトの王パロの所に行つて「私たちをこのエジプトから出してください」と願います。でも、パロはそう簡単に許してくれませんでした。パロはそれを聞いて、ますますイスラエルを苦しめるようになったのです。そんな中、神様はエジプトに対して、モーセを通じ、いなごやかえるの大群、病気などの災い

を九回も与えました。それでも、パロは強情でイスラエルのエジプトから出しませんでした。最終的に神様は一つのことをモーセに示されました。

神様はモーセに「真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に行きます。その時、国中のういごや家畜のういごもみな死ぬであろう」と大きな災いが起こることを伝えられました。もし、このままだとイスラエルの人々までも災いに会い、死んでしまいます。でも、神様は、ちゃんとその逃げ道を示されたのです。それが過越と言われるものです。イスラエルの人々が、神様の言われるものを食べ、そして小羊の血を家の入口の二つの柱と、かまいに塗れば、神様はその血を見てその家に災いを与えることなく過ぎ越すと約束されたのです。神様が言われた災いが現実になりました。国中に悲しみの叫び声が響き渡りました。でも、神様の約束を実行したイスラエルの人たちだけは、災いから守られ、救われたのです。そして、その後エジプトから脱出することができました。

### 守ってくださる神様

神様は、罪を嫌い、裁かれるお方です。もし、皆さんが罪の奴隷のままにいるなら、エジプト人が神様の災い

に打たれたように、神様の裁きを受けなければなりません。でも、その裁きから守られ、救われる方法があります。それがイエス様の十字架であり、イエス様の血です。皆さんが罪を悔い改め、イエス様を救い主と信じるなら神様は、裁きを過ぎ越してください。

龍二君は、以前、電車の運賃をごまかしたことがありました。ある時、聖書のお話を聞いていると「皆さんは、告白していない罪、赦されていない罪はありませんか。神様はご存知ですよ」と教会会学校の先生に言われたのです。すると、あの時のことを思い出したのです。龍二君の心は重くなりました。そして、イエス様に正直に罪を悔い改め、イエス様により赦して頂きました。すると、龍二君の心は重苦しさから脱出できたのです。

### まとめ

神様は、愛するあなたを罪による裁きから守りたいとイエス様を与えてくださいました。イエス様を信じて、神様の大きな愛で守って頂きましょう。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)

# 聖書 出エジプト16・31〜36 テーマ 荒野で与えられた食物

## 序論

(石田高保)

荒野でマナの降った出来事は、神が天の父として神の子どもである私たちを、見えるところ見えないところどこに配慮しておられるかを見ることができ。

## 一、からだへの配慮

イスラエルは神への不従順のために荒野で40年間過ごすことを余儀なくされた。それはあまりに厳しすぎると思われる処置であるが、その一方で神はイスラエルの民およそ200万人を毎日養うことをお忘れにはならなかった。パレスチナやシナイ半島の荒野は乾燥が厳しく、僅かなオアシスを除いては灰褐色の世界が延々と続いている。水資源はわずかで農耕など思いもよらない。そういう環境で生き延びられるのはわずかな人間と家畜だけである。とうてい200万人のイスラエルが数日でも生き延びるのは不可能である。しかしそれを可能にしたのは神の奇跡以外あり得ない。彼らはみずからの不従順の実を刈り取るようにして荒野で40年間さまよったわけであるが、神は彼らを憐れんで飢える

ことがないようにマナを降らせて下さった。

そもそも神がマナを降らせることになったきっかけは、エジプトを出て2か月半目、荒野でひどい思いをするくらいならエジプトで死んだほうがよかったと不平を募らせたことであつた(3)。その時から神は夕方にはうづらを呼び寄せ、朝にはマナを降らせ、一日でも飢えることがないようにし、それをカナンの地に入るまで40年間続かせた。神は6日間マナを降らせ、6日目には7日目の分と一緒に2日分降らせ、7日目には降らせなかった。それは7日目が安息日で、マナを集めるという労働も休まなければならなかったからである。だから7日目に集めようとしても見つけることはできなかった。また沢山集めた者も、少ししか集められなかった者も、家族で分け合ったら全員満腹した。

ここには私たち神の子どもを一日も欠かさず養おうという天の父の姿を見る。私たちは肉体的にも物質的にも完全に神に依存している。マナもうずらも民が努力したから得られたのでは全くない。文字どおり天から降ってきたものである。私たちの口にする食物も、人の手を経ているとはいえ、本をただせば天から降ってきたものと言えよう。神

は私たちの霊のことばかりではなく、からだのこと、物質的なこと、生活全般にわたって深く配慮しておられる。

## 二、霊への配慮

イエス様は「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」(ヨハネ6・35)と断言された。これはマナの箇所に対する最高の注解である。イスラエルに降ったマナは実際の食べ物であるけれども、イエス様自身は天から下ってきて、この世に命を与える神のパンである。天からのマナ、神のパンとは何か。それはみ言葉なるイエス様ご自身のことであろう。これを食べるということは、イエス様を心の拠り所とし、イエス様に聴いて従ってゆくことを意味する。具体的には説教や聖書通読によってみ言葉を自分の生活に当てはめることである。また聴くだけで終わらないために、ほかのクリスチャンとみ言葉を分かち合って生活に適用するという責任を負い合うことである。

神は私たちのからだのことだけでなく、私たちの霊について深く配慮しておられる。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタイ4・4)というみ言葉は何を意味しているのだ

ろうか。それはみ言葉なるキリストを食べることによって、私たちが未信者の世界で世の光、地の塩という主の力ある証人として生きるためにほかならない。自分の養われることばかりを求めているは片手落ちである。自分が養われつつ、他のクリスチャンや未信者の人を養うことが神の目的である。み言葉を聴いたり学んだりするだけではなく、それを家庭や職場や学校や地域社会で実践するならば、私たちは自分のものではない神の国の影響力を及ぼすことができる。まずは自分がクリスチャンであることをできるだけ早いうちにカミングアウトしよう。そして聖書の価値観を語り合う中でお分かちしよう。そうすればこの世にはない別の世界の雰囲気ひきつけられる人が起こされてくる。人々は神なき荒野の世界で神の国のマナを潜在的に求めている。

## 結論

神は天の父として私たちを養わないではおれない方であることを当てにして、いつさいの必要を祈り求めてゆこう。そして神の言葉で生きることにチャレンジしよう。

## 研究資料

(宮澤清志)

先々週から、モーセの生涯を追いつながらの礼拝が続いている。本日の箇所は、食料(マナ)と信仰に関わる出来事である。というより本章全体が食料と信仰とに関わる事柄である。礼拝のための備えをする者は、本日の該当箇所だけでなく、本章全体に目を通し、関連性や類似性などを頭に描きながら備えるべきである。なお、新聖書大辞典は、この章の物語のもつ意味を

(1) イスラエルの大群衆の食用に足るほどの大量であったこと。

(2) 採集した分量が奇跡的に均等であったこと(16・18)。

(3) 安息日の分(その前日に集められた2日分の量)は腐敗しなかったこと(16・23)。

(4) その1オメルは「あかしの箱の前」に置かれて永久保存に耐えたこと(16・33)。

とまとめている。

さて、マナについてはむしろ14〜30節の方が詳細に述べられている。では、31節以降の物語の中心点は何か。それは、この経験が、イスラエルの民にとっては「記念」とされ

るべきであるということにある。14〜30節が、マナの出来事そのものに重点が置かれたのに対して、この箇所は、主は40年に渡ってイスラエルの民を養い(暗唱聖句参照)、更に主の臨在のあるところどこにおいても主は私たちを養い続けて下さることが語られるのである。

一方イエスは肉体の食物としてのマナの限界性を示し、ご自身を「天から下ってきた生きたパン」と語られ(ヨハネ6・49)たことも、同時に黙想しておきたい。

## テキスト

31 詳細については16〜21節にも記されているので、そちらを併せてお読み頂きたい。また民数記11・4〜9にも関連した記事がある。そちらにも目を通していただきたい。マナ ヘブル語は「マン」であるが、「マナ」とは、七十人訳聖書に由来している。マナの起源については明らかではないが、語源的な説明では、「これはなんである」(16・15)からきたとされている。この言葉は、同時に「これはマナである」と訳すこともできる言葉である。後のイスラエルの人々は、このマナを知らなかった。そのため、入念な描写がなされているのであろう。コエンドロ セリ科の植物で、初夏に白い花をつける。香辛

料としても広く用いられている。エジプトでは、コエンドロの種も用いていたので、イスラエルの民もよく知っていたことであろう。

これらの特徴から、「マナ」は、アラビヤ語の「マン」とおおよそ結論づけられている。これは、ぎりぎりの樹に生息する虫が出す排出物ではないかと推測されている。今日でも、6月盛夏には、ひとりで一日1kg集めることができるという。しかし、その実際の特徴が何であれ、神はこの不思議な出来事を、荒野を放浪した全期間、イスラエルの民に与えられたことを私たちは感動をもつて伝えたい。

32〜33 イスラエルの民は、神が不思議な方法で、彼らを荒野の旅の間で養われ、導かれたことを記念し、覚えるために、このマナをつぼに入れて保存するようにと命じられたのである。この荒野の旅は、神の恵みによってエジプトでの奴隷状態から救い出され、約束の地カナンへと導かれた旅であった。

32 オメル 「麦の一束」の意味で、1束の脱穀量から来た固体量の単位。1エパの10分の1（36節）で、約2.2リットル。日本の一升ますのように、各家庭にはそ

の容器があった。

33 つぼ ここだけに用いられている言葉である。聖所について述べられているヘブル9・4には、このつぼを「金のつぼ」と記述しているが、これは七十人訳聖書によるものである。実際にこのつぼが金であったかどうかは定かではない。主の前に 具体的には「あかしの箱の前に」（34）ということ。この場所における目的は、未来の子孫のために保存されるということであった（32）。この、主の前に置かれた一日分の1オメルのマナは、永久に腐ることはなかった。

34 あかしの箱 神の意志を表現するものとしての十戒（あかしの板）を納めてあったためにこの名が付けられた。シナイ山で、主がイスラエルの民との間に結ばれた契約を思い出させるしるし、あかしの品として、モーセに与えられたものである。

35 神は、イスラエルの人々がカナンの地にはいるまでの40年にわたって民の必要に応じてマナを不思議な方法で与え続けた。これは、驚くべき神の奇跡である。

参考図書 R・アラン・コール『ティンデル聖書注解』「出エジプト記」（いのちのことば社）他。



## 聖書

出エジプト16・31〜36

タイトル  
暗唱聖句

マナで養ってくださる神様

イスラエルの人々は人の住む地に着くま

で四十年の間マナを食べた。

16・35

## 目 標

神による養いと守りがあることに信頼して生きる。

## 導入

(和田 治)

クイズですよ！ ある小学校で、一つのクラスに30人の生徒がいます。一学年に3クラスだと、一年生から六年生まで合わせて何人になりますか？ そう、540人ですね。一クラス分の給食だけでも、結構ありますよね。それが全校生徒の分だと、ものすごい量になります。だって、一人一つのパンだけでなく、540個ですもんね！

先週は、イスラエルの人たちが神様の大きな力によってエジプトを脱出したことを学びましたね。いったい何人くらいの人がいいたんでしょう？ な、なんと、二百万人もの人たちがいたんですよ！ えゝそんなに？ それも、田んぼも畑もない、草一本生えてない荒野！もちろんスーパードコンビニもありません。普通なら、4〜5日でも生きていられないは

ずなんです。でも、神様は不思議な方法で彼らを養われました。しかも一週間や一ヶ月どころじゃないんです、四十年間も！ では、どうやって？

## 天からのマナ

「あれれ？ うわわわ〜！ この白いものはいったいなんだろう？ 見たことないよ〜！」ある朝、イスラエルの人たちはびっくりして叫びました。なんと、うるこのような薄い何かが、露のようにず〜っと広がっているんです。モーセは言いました。「これは主があなたがたの食物としてお与えになるパンなのだ！」え？ 食べれるの？ 「それぞれの家族の人数によって、ひとり一オメル（2リットルのペットボトルくらい）ずつ、持って帰って食べなさい」だって…。「ばくつ」。「んん！ 蜜の味がするおせんべいみたい、おいし〜い！」イスラエルの人たちはそれを「マナ」と呼びました。「これは何だろう？」っていう意味です。それからずっと毎日、神様はみんなにマナをお与えくださいました。ただし、七日目は安息日なので、六日目だけ倍の量のマナが取れたのです。七日目には全く取れませんでした。すっごく不思議ですよね。安息日は神様を礼拝する日ですから、働かなくて良いように守られたのです。なんて優しく、すばらしい神



様！ イスラエルの人たちが倒れてしまわないように、ずっとマナを与え続けて下さったなんて！

### 私たちにもマナが・・・

モーセは言いました。「一オメルのマナをつぼに入れて、契約の箱の前に置きなさい。子どもたちや孫たち、子孫のみんなが、神様への感謝を忘れないためだ」。

なるほど！ じゃあ、わたしたちは神様がして下さったこと、忘れてないかな？ そこで、みなさんに考えてほしいことがあります。今朝は何を食べてきましたか？ 昨日の夜は？ では、それらの食べ物、元をたどればいつたいどこから...？ もうわかるよね、実は、パンもごはんも、お肉もお野菜も、お菓子やジュースだって、み〜んなもともとは神様がお与えくださったものですよ。今、日本には一億二千万人以上の人たちが住んでいます。そのほとんどの人たちが、毎日ひもじい思いをしないでお食事をいただいている...考えてみるとこれはすごいことです。忘れないで！ 全部神様の恵み、神様がみんなを養って下さってるってこと。ありがとうございます、神様！

### 天からくだってきたパン？

イエス様は「わたしが命のパンである。わたしに来る者は

決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」とおっしゃいました。私たちの心、霊、命は、どうやったら満腹になるんでしょうか。イエス様こそ「いのちのパン」、私たちが本当に満たすことが出来るお方なのです。私たちに必要な食物を与えて養ってくださる神様は、私たちの内側、私たちの心、霊、命もしっかりと養って成長させてくださるんですね！

ではどうやって？ 神様のみ言葉を食べ（心から信じ）、イエス様に聞き従っていけば良いのです。教会学校で聞かれるみことばを大切にし、こころにしっかりとくわえ、毎日思い巡らしましょう。生きる力が不思議なようにもりもりこみあげてくるようになるんですよ、ハレルヤ！

### まとめ

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と主は言われました。荒野の四十年間、マナでイスラエルの人たちを養われた主が、今も私たちを養っていて下さいます！ 安心して従おう、み言葉というマナをしっかりと味わいながら！

♪愛・あい・アイト（PW83、イン66）

# 聖書 出エジプト17・8～16 テーマ 祈りの手

## 序論

(石田高保)

アマレクとの戦いは、クリスチャンにとって霊的戦いと解釈することができる。その相手は人間ではなく、悪の霊に対する戦いである(エペソ6・12)。その備えとして神の武器で身を固めるように命じられているが、その最後に祈りが強調されている。つまり霊的戦いには祈りが不可欠であるということだろう。

## 一、霊的戦いの必要

イスラエルにとって初めての戦争である。出エジプトの際、エジプト軍と戦争したとは言えない。なぜなら神がエジプト軍と戦われるのを傍観していただけだったから。また出エジプトの際、ペリシテとの戦争も回避された。まだイスラエルには戦う準備ができていなかったから。しかしこのたび神はアマレクがイスラエルを襲うのを許され、イスラエルは戦うようにチャレンジを受けた。それはイスラエルもやがてカナンの人々と戦って、約束の土地を勝ち取る

ために慣らしておかなければならなかったからだろう。当時の容赦ない弱肉強食の世界で生き残るためには神の民も戦争によって強くなる必要があった。またイスラエルは荒野で水のことや食料のことで不平不満をたびたび募らせ、モーセと神に食って掛かることをなかなかやめようとしなかった。このようなときアマレクが襲ってきたことは、イスラエルにとっては降って湧いたような災難であった。しかしアマレクとの戦争は彼らが自己愛的消費者マインドとも言うべき幼い状態から、自立した大人の民として、貢献者として変えられるためにも必要だったのかもしれない。私たちが試練が来ると祈りに真剣度が増し、よりリアルなものとなるのではないか。

「順境の日には楽しめ。逆境の日には考えよ」(伝道7・14)。

## 二、霊的戦いの実際

イスラエルはアマレクが襲ってきたためにやむなく受けて立つわけであるが、モーセの立てた戦術は、ヨシユアを総大将にし、自分は神のつえを取ってアロンとホルを連れて丘の頂に登り、祈りに専念することであった。そしてアロンとホルはモーセの手が下らないように支え続けた。

それはモーセの手が下がるアマレクが勝ち、上がるとイスラエルが勝ったからである。実に奇想天外な戦術である。古今東西、まず見ることのできない兵法だろう。背後の祈りによって戦争の勝敗が決められるとは。見えない神のお働きを見えるように知ることのできる故事である。

翻<sup>ひかえ</sup>って私たちの霊的戦いはどうだろうか。無勝手流という剣術もあるが、武道であればたいい型から入るものである。祈りにおいてもいちおうの型はあるけれども、だんだんに自分の体質に合った型をつくればよい。特に霊的戦いのための祈り、つまり誘惑に打ち勝つための祈りは、誘惑に弱い霊の領域を見極めることから始まる。悪魔に付ける機会を与えてはいないか。依存症的な習慣はないか。誰かを赦さないでいることはないか。密かに誰かの不幸を願っていることはないか。誰かに怒りを燃やし続けていることはないか、など。そのままにしておく悪魔の付ける足場をつくってしまう。それを見極めたら正直に神に告白しよう。そして自分の力では克服できませんから、助けてくださいと祈ろう。さらにそれを十字架につけて手放す祈りをしよう。

またアロンとホルがモーセの祈りを助けたとあるよう

に、祈りは個人的なものだけではなく、相互依存的なものでもあることも覚えたい。つまり他のクリスチャンに遠慮なく祈ってもらうこと、祈りをリクエストすることである。それは神の家族として自然な姿でもある。神は私たちが自分ひとりで成功することを計画しておられないようである。大伝道者パウロでさえ、「大胆に福音の奥義を明らかに示しうるように、わたしのためにも祈ってほしい」(エペソ6・19)とエペソのクリスチャンたちに謙遜に要請している。

また誰かと罪の告白をし合うことも霊的な戦いに効果的で力がある。「互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ5・16)とあるように、伴侶や親子、同性の友人などに自分の罪の告白のできる相手を持つならば、依存症的な習慣を克服しやすくなる。

### 結論

クリスチャンライフを生き生きと送るためには、自分ひとりで十分ではなく、必ずキリストのからだである他のクリスチャンとの交わりを必要とする。特に祈り合うことによって霊的戦いに打ち勝ってゆこう。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

**8 アマレク** アマレクはエサウの孫にその源を発する民であり(創世記36・12)、非常に好戦的な遊牧民である。この部族は、シナイ半島のカデシユの地に住んでいたといわれている。**レピデム** 荒野におけるイスラエル人の宿营地のひとつ。

**9** この節で語られるモーセの言葉によると、アマレクと戦ったイスラエルの軍隊は、職業的軍人ではなく、この戦いのために特別に選ばれた軍隊だったようである。そしてヨシユアはそのイスラエル急造軍を指揮する責任を任された。一方のアマレクは、非常に好戦的な民族であった。**ヨシユア** 聖書の中で、ヨシユアという名が記されるのはここが最初である。実際にはこの時の名は「ヨシユア」ではなく「ホセア」だったようである(民数記13・16)。いずれも名の意味は「主は救い」であり、ギリシャ語では「イエス」となる。**出てアマレクと戦いなさい** モーセは前回イスラエルのつぶやきに対して、主に叫ぶことによって解決した(17・4)。しかし今回は

ヨシユアに直接命じている。**神のつえ** この章(17章)における鍵の言葉のひとつである。このつえは出エジプトにおいても神の裁きの道具として用いられ(7・20、8・5他)、また渴きを潤す水を出す道具としても用いられた(17・6)。いわば神の力の象徴である。このつえの意味する神ご自身の臨在と、ヨシユアをはじめとする人間の服従とが、この奇跡の肝である。

**10 ホル** 歴史家ヨセフスは、この人物をモーセの姉ミリヤムの夫としているが、定かではない。この人物は、この箇所その他にはモーセがシナイ山に登っている間、モーセにかわって民を監督した(出エジプト24・14)という記録が残っている。

**11-12** 谷間での戦いの模様が簡潔に描かれている。しかし、出エジプト記の著者の関心は、戦いそのものではなく、あくまでもモーセの挙動に集中して描かれている。直接アマレクと戦って勝利を得たのはヨシユアであるが、勝利を決定したのはモーセを通して働かれた神ご自身であった。ここで、古来このモーセの行為が何を意味するかが問われてきた。まず、イスラエルの民に対しては主の旗印を高く掲げることを意味していると考えるこ

とができる。この考えは、特にモーセが握っている神のつえ(9)あるいは15節の言葉との関連において語られる。もう一つは両手を挙げて祈ることを意味する。ダビデは、「わたしは生きているかぎり、…両手を上げて祈ります」(詩篇63・4)と告白している。

しかし、ここでもう一つ私たちが考えるべきことは、この奇跡における神の介入の仕方である。神は、イスラエルとアマレクが戦うに際し、具体的には何も語られなかった。ここでモーセは、自らに与えられた最大の武器をもってアマレクに立ち向かったのである。すなわち、それが神のつえ(信仰)であり、また執り成しの祈りだったのである。

12 既に齢80を越えたモーセにとって、この行為は疲れを伴うものであったに違いない。当然一日中両手をあげ続けることはできない。そこでアロンとホルが、両手をあげるモーセを支えるために必要であった。そしてその援助をモーセも快く受けたことであろう。日本人は、とにかく援助を受けることにある種のためらいを覚えることが少なくない。しかし、同労者の助けを受けることを決して恥じてはならないのである。

14 この戦いの勝利は、イスラエルにとっては非常に重要な経験であったことは言うまでもない。それゆえ主はこの出来事を後生に伝えさせるために、この勝利を書物に記すこととそれを語り伝えさせることを求めた。これを書物にするして この指示は、イスラエルの伝承の中で特異なものである。イスラエルは「主の戦いの書」をもっていたといわれている(民数記21・14)。あるいは何らかの旅の記録をつけていたようである(同33・2)。このような記録がイスラエルの民を励ます役割を担ったことは想像できる。耳に入れなさい 「読んで聞かせよ」(新改訳)。この出来事を語り継がせるためであろう。

15 モーセはアマレクに対する勝利を記念して、祭壇を築き、それに「主はわが旗」という名を付けた。主がイスラエルのために戦われたことを感謝するためであった。

16 主の旗にむかって手を上げる 「旗」は、新改訳と新共同訳では「御座」と訳されている。いずれにしてもその意味するところは、右手を主の臨在の象徴である祭壇(あるいは旗)の上に置き、主の戦士のひとりとして、主に対して自らをささげるということである。

参考図書 11月2日分に同じ。

## 聖書

出エジプト17・8～16

## タイトル

信仰の祈りで、勝利！

## 暗唱聖句

モーセが手を上げているとイスラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。

17・11

## 目標

御国のための戦いにおける祈りの重要性を知って、祈る者となる。

## 導入

(和田 治)

みなさんは「剣道」って知っていますか？ そう、「めん！」って打つやつです。手に持っている刀のようなものは「竹刀（しなひ）」といいます。相手と戦うとき、その武器がないと、絶対に勝てません。実は、私たちも目に見えない敵と戦っているんです。え？ 知らなかった？ どんな戦いなのか、武器はなんなのか、どうやったら勝てるのか、神様に教えていただきましょう！

## 祈りによる勝利

「どどどどど〜！」ものすごい大軍がイスラエルの民と戦うために向かって来ました。アマレク人たちです。荒野を進み、神様がお約束くださった地に行くためには、戦う

しかありません…。モーセが言いました。「ヨシユアよ、お前が戦士たちを連れて戦うのだ。私は明日、神様の杖を手に取って、丘の頂に立つ！」「はいっ！」

翌日、戦いが始まりました。モーセはアロンとホルと一緒に丘の頂に上りました。モーセも戦うのです！ ただし、その方法は思いもよらない特別なものでした。

## 手を上げ続けたモーセ

あれ？ 不思議！ モーセが手を上げているとイスラエル軍が敵をどんどん倒していくのです。でも、手を下げると、途端にアマレク軍が盛り返しているではありませんか！ 彼の手に特別な力があつたのでしょうか？ いいえ。実は、「主よ。どうかイスラエルの民を守って下さい。勝利を与えて下さい！」ってモーセは両手を上げて祈っていたのです。神様が祈りに応えて、勝利を与えて下さっていたのですね。でも、モーセも汗びっしり、ずっと手を上げ続けるなんて無理です。そこで、一緒にいたアロンとホルの出番！ 二人がモーセの両側で、その手を支え始めました。これならずと祈り続けることが出来ます。その後、二人に支えられ、モーセは、日が暮れるまで祈り続けることができました。戦いは？ もちろん、神様が祈りに



応えて下さって大勝利でした。ハレルヤ！

### 私たちの戦い

私たちみんなの敵…それは悪魔、悪霊なんです。パウロは「悪魔に負けないように、神様がくださる武器を取れ！わたしたちの戦いは、天上にいる悪の霊に対する戦いなのだ！」と言いました。モーセのように私たちも「お祈り」っていう強力な武器が与えられているのです。あの時に、もしモーセが「あゝ、つかれた！もう手を上げてなんかられないよ、おしまい！」ってお祈りを止めていたらどうなったでしょう？決して勝てませんでした。私たちも、悪魔から守られるように、神様にお祈りすることがとても大切なんです、自分自身のためにも、大切な人たちのためにも。神様はお応えくださいます！

### 信仰をもつて

モーセは丘に登る時、あるものを持っていたでしょう？そう、杖です。エジプトにいる頃から、モーセが杖を手にした時、神様の力によって奇跡が起きました。その神様の力を信じる「信仰」のしるし、それが杖だったんですね。私たちも、神様が必ず、一番良い時に一番良い方法で、お祈りに答えて下さると信じる「信仰」をもって祈りましょ

う。悪魔は私たちを神様から引き離そうと働き続けています。でも、神様を信じる「信仰の祈り」という強力な武器があれば、必ず勝利が与えられます！

### 忠くんのこと

忠君は教会学校の先生が「忠君、祈ってるからね〜！」ってよく声をかけてくれるのが、あまり好きではありませんでした。だって、口先だけのようないきがしたから…。ところがある日、学校の帰り道にその先生のお家の前を通りかかってビックリ！「主よ、どうか、愛する忠君を祝福してください。もうすぐお家に帰る頃です。お守りください。今度の日曜日にも元気に教会に送ってください。」って一生懸命お祈りしているではありませんか。忠君は嬉しくて涙があふれてきました。それ以来、「ああ、お祈りで支えられているんだ、だから大丈夫、悪魔に負けない！」って思えるようになりました。今では忠君もお友だちや家族のために祈っています！

### まとめ

神様は信仰の祈りに応えて下さいます。今日から毎日、神様のため、誰かのために、お祈りしましょう！

♪主のちからを♪(PW25、イン71)



# 聖書 出エジプト20・1～17 テーマ 十戒

序論

(高橋頼男)

十戒には、人間が神の前にどう生きるべきかについて神からの指針が記されています。人はいかに生きるべきか、何が善であり何が悪であるか、何を求め、何を避けるべきであるかについて、神の基準が明らかにされています。前半は神との関係について、後半は人との関係についての戒めから成っています。

## 一、神との正しい関係

人間は「関係性」(交わり)の中で生きるものとして創造されました。だれも一人ぼっちで生きる人はいません。常に他者との関係の中で生きており、その関係の正しき、豊かさがその人の幸せに直結しています。私たちは他者と愛し合い信頼し合うことができるなら、幸せを実感します。しかし、ぎくしゃくしているならしんどい生活を余儀なくされます。

しかし、人間関係の前に、神との関係があります。神は愛によって私たちを創造し、愛をもって私たちとかか

わりたいた切に願っておられます。このような神がいらっしゃるのですから、このお方を無視して人の幸いや生き方はありません。真に幸いな生き方を願うなら、まず、私たちの創造者である神を認め、このお方の前に真実なあり方、生き方が問われなければなりません。創造主との正しい関係を持ち、そのあるべき関係にふさわしく生きていくなら、私たちは真に豊かで祝福に満ちた人生を生きることができるようになります。

## 二、神を第一とする(3)

〈わたしのほかに、なにものをも神としてはならない〉との第一戒は、神との関係において最も重要な事項で、後に続くすべての戒めの根幹をなします。人生は「わたし」が中心ではなく、目的でもなく、自己実現(神を第一としない人間の生き方の典型)が最高の生き方ではありません。また、自分の幸せや目的のために神を利用することも間違っています。

「真に人生を問うなら、まず、純粹に神から始めなければなりません。なぜなら神がわたしを造られたからです。私たちは自分で自分を造ったのではないので自分が何のために生きているのか分からないのは当然です。人

生を自分という間違った出発点から始めるなら人生に意味を持つことはできず、造り主である神から出発する時、私たちの人生は真に意味を持つものとなるのです」(人生を導く五つの目的 リック・ウオレン)。

「御子によって造られ、御子のために造られたのである」(コロサイ1・16)。

### 三、神に贖われた民(2)

私たちは神によって創造された者であるだけでなく、また、神によって贖<sup>あがな</sup>われた民です。〈わたしは…あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したものである〉と書かれているように、この戒めは、神の力強い御手でエジプトから贖い出された民、イスラエルに対して命じられています。神に造られ祝福をされた人間が戒めを破って罪を犯し、虚しくなつて神のさばきに服するものとなりました。しかし、神はそのような人間を憐<sup>あは</sup>れみ救い出して下さいました。神はその大きな愛のゆえに御子の命を代価として私たちを贖って下さいました。贖われたものは、当然、贖ってくださった方の所有となりました。しかも、驚くほどの大きな犠牲が支払われたのです。測り知れない父の愛と犠牲を想い、十字架の上に命

をささげられたみ子の愛に迫られるとき、私たちの生き方を定める明確な決断が生まれます。

「彼がすべての人のために死んだのは、生きている者どもはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである」(Ⅱコリント5・15)。

### 四、神を愛する(マタイ22・37)

私たちが生かされているのは神を愛し、神のために生きるためです。このお方のためには、何ものにも優る愛をささげて生きるのです。何よりも神との関係(交わり)を大切にし、愛し、神と共に生きていくのです。私たちが神の戒めを守ることは苦痛ではありません。神を愛しているからです。それは自然なことであり、むしろ、神が嫌われること、神の愛に反することはしたくありません。主の御名を尊び、主日を神のために聖別し、主にある兄弟姉妹と共に主を賛美し礼拝することは私たちの心からの喜びです。

### 結論

「主よ、何ものにも優つて、あなたを愛します」と申しあげましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

十戒は、神とイスラエルの民との間に結ばれた契約の基礎をなすものであるが、民はこの契約を破り、やがてキリストによる新しい契約が結ばれた。クリスチャンはもはや律法のもとにはいない（ローマ6・14）が、十戒は神と人、人と人とのあるべき関係を示しており、今日においても有効である。十戒は私たちに何が罪であるかを教え、キリストへと導く養育係としての役割を持つとともに（ガラテヤ3・24）、キリストによって成就され（マタイ5・17）、キリストに贖われた者が聖霊によってそこに生きることのできる恵みの約束となった。今回はその前半（第一〜四戒）の対神関係に焦点を当てる。これらは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ22・37）に集約される。もちろん、対神関係は対人関係と深く関わっており、切り離して考えることはできない。

## テキスト

2 十戒の序文である。ここに神と民との関係が述べられている。あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出

した者である。すべての戒めは、贖いを土台とする。奴隷状態から解放された民は、この神の恵みに応え、主だけを愛し信頼するように契約を結んだ。十戒は束縛ではなく、贖われた民の生き方が示されている。

3 あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。第一戒は信仰の原点を宣言しており、あらゆる戒めの根幹をなす。ここで命じているのは、まことの神以外のものを神としてはならないということ、つまり偶像の禁止である。他の神々や富だけでなく、主なる神以外に頼りにするものや、神以上に大切なものがあるならば、それが偶像となる。道徳的乱れは、神以外のものを神とするところから始まる（ローマ1・24〜25）。

4〜6 あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。第二戒は礼拝様式に関する命令で、偶像を造ること、拝むこと、それに仕えることが固く禁じられている。刻んだ像（ヘペセル）木や石を彫って造った物。

ここでは像そのものを禁じており、たとえまことの神を礼拝するためであっても像を使用してはならない。これは神を対象物とし、人間が主体となる御利益宗ごりやくしゆきよう・教と化してしまふ。神は霊であるから、霊とまこととをもつて

礼拝すべきである(ヨハネ4・24)。古代近東では、神の像は、その神の臨在の証拠と考えられていたので、これは例外的な戒めであった。**ねたむ神** 新共同訳では「熱情の神」と訳されているように、神はひたすらご自身の民に愛を注がれたからこそ、神だけを愛し仕えることを求められる。この熱情の極みは御子の十字架である。

**三、四代** 罪の直接的なさばきは犯した本人に臨む(エゼキエル18章)が、罪は子孫に影響を与え、連帯責任としてのさばきは歴史の中に現れる。**恵みを施して、千代に至る** 恵み(ヘセド)は契約に基づく愛。神の愛は変わることがないゆえ、恵みは千代、つまり永遠に続く(エレミヤ31・3)。

**7 あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない** 「みだりに」(ヘ)シャールは「むなし、偽り、悪を行う」という意味がある。第三戒は主の御名を軽々しく唱えたり、偽りの誓いのために用いたり(レビ19・12)、呪いなどに用いたりすることを禁じている。これは人間が自己目的のために神を利用することになり、神が主であるという本来の秩序が失われた状態である。またこの戒めは積極的には主の御名があがめられる

べきことを示している(マタイ6・9)。

**8、11 安息日を覚えて、これを聖とせよ** 「安息日」は「休む、やめる」(ヘ)シャールから来ている。つまりこの日は、ただ休む日ではなく、今までしていたことをやめる日である。聖とするとは、この日を神のための日として取って置くということである。第四戒は一週間のうちの一日を区別して労働を中止し、その日を特別に神のためにとっておくことを命じている。**七日目** この日は神の創造の御業を覚えて感謝する日であるとともに(11)、神がイスラエルをエジプトから救い出されたことを覚える日(申命記5・15)でもある。キリストの復活後、日曜日が主の日となった。復活の主を礼拝し、神の新しい創造を覚え、主の救いのみわざを感謝し賛美する日であり、その精神は同じである。

**12、17 十戒の後半(第五、十戒)** は対人関係について扱っており、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」(マタイ22・39)に集約される。

**参考図書** 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書註解』(いのちのことば社) 他。

## 聖書

出エジプト20・1～17

## タイトル

従おうよ、愛する神様の御心に！

## 暗唱聖句

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。出エジプト20・3

## 目標

神の御心を知り、従う者となる。

## 導入

(和田 治)

「ねえママ、もうすぐパパのお誕生日だよね。パパが一番喜ぶものってなあに？」5歳のひとみ君は、パパが大好き！でも、パパの「心の中」までは分かりません。それでママに尋ねたんですね。かわいいね！

ところで、皆さんは天のお父さまの「心の中」、つまり心が知りたいですか？とてつもなく大きな愛で私たちを愛して下さっている神様の心を知って、神様が喜んで下さる生き方をしたいな……そう思いませんか？今日は、神様の心がつまった「十戒」を学びますよ。

## 神様はひとりだけ

皆さんは、聖書の一番最初に書かれている言葉を覚えていきますか？そう、「はじめに神は天と地とを創造された」ですよ。天地の全てをお創りになったのが神様

です。私たちの周りには、木や石や金属で作られた神がいっぱいありますよね。それらは、人間『が』お造りになった神様ではなく、人間『が』作った神で、偶像といえます。どんなに立派な偶像でも、どんなにたくさんの人々から拜まれていても、全部偽物なのです。

天地を、そして私たちを造ってくださった本当の神様は、たくさんの方々の神々の中で一番偉いではありません。たったおひとりの本物の神様なのです。神様はまず「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」とはっきりみ心を示してくださいました。このお方だけを礼拝しましょう。神様はお喜びくださいます。

## 他に神を造ってはだめ！

皆さんは、偶像を神様のように拜むことはないでしょう？でも、神様よりも大事なものがあんなら、それは偶像です。偶像を英語で言う『アイドル』です。あれ？テレビにも出てますよね、アイドルって。皆さんはどんなアイドルが好きですか？もしもクロボーバーZ？嵐？でももしも、アイドルのほうが神様よりもっと大事になってしまったら、もうそれは偶像です。好きなテレビのために礼拝をお休みするなら、それはもう偶像

礼拝なのです。皆さんは大丈夫ですか？

実は、私たち人間が神様以上に大事にしやすいもの、一番偶像にしやすいものがあります。それは『自分自身』です。「じこちゅー」って言葉、知ってますよね。いつも自分が中心の人のことです。私たちは、他の人よりも神様よりも、『自分』を大事にしてしまいいやすいのです。そして、自分のために神様がいる！って思ってしまう。そうではありません！神様が、ご自身のために私たちをお造り下さいました。自分のために神様を召使のように使おうとしてはなりません。「神様、私はあなたのものです。お用い下さい」と、神様中心の生き方を選ぶのです。それが、第二の「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない」というみ心に従う道なのです。

### 神様のお名前は大切に！

第三に「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない」と言われました。時々、「オーマイガーッ！」ってテレビで言っています。実は、あのことは「オー、マイ、ゴッド」で「ゴッド」は神様のことなんです。つまり、神様のお名前を使って、驚きやいやな思いを表す、間違った言葉なんです。神様を愛する私

たちは、そのお名前をふざけて使ってはなりませんよね。

### 日曜日は神様を礼拝する日

第四に「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と言われました。日曜日は、愛する神様を礼拝するための日です。心から神様に感謝を込めて賛美をささげます。悔い改めるべきことを祈ります。み言葉をいただき、神様の愛の力でいっぱいに満たされて、一週間をスタートするので。そのための喜びの礼拝をささげるのが日曜日です。

### まとめ

これまで十戒の第一から四番目までを見てきました。イエス様はこれらをこうまとめなさいました。『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。そして、五番目から最後までを『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』とまとめられたのです。神様の心が分かりましたね。どんなに頑張っても神様のみに従う力は私たちからは出てきません。でも大丈夫！ちゃんと聖霊が私たちに、み心に従う力をお与え下さいます。だから信じて従おう、愛する神様のみに！  
♪あなただけがわれらの神♪

(プレイズ&ワースhip楽譜集Ⅰ)



# 聖書 民数記21・4～9 テーマ 信じて見上げる

## 序論

(石田高保)

イエス・キリストを信じませんかと言われると、清水の舞台から飛び降りるような決心を迫られるように感じるかもしれない。あるいはキリスト教について何もかも知らなければできないように受け取られるかもしれない。それに対して今日の箇所からイエス・キリストを信じて救われるということ、絵画的に理解することができる。

## 一、信じるとは見上げること

イスラエルが荒野をさまよって数十年が経ち、モーセの兄アロンは世を去った。エドムの地を回ろうとしていたとき、民は生活の困難に耐えがたくなって、神とモーセとに不平を言った。水もまともな食物もなく、マナという粗悪な食物はいやになりましたと。すると主は間髪を入れず火のへびを民のうちに送られ、へびは民をかんだので、多くの者が死んだ。火のへびとはひと噛みで死に至らせる強烈な毒を持つへびのことで、超自然的に出現したもののかもしれない。同じような例が11章にあり、民が食べ物のことで

不平を鳴らした時、非常に激しい疫病で民は主によって撃たれた。罪には必ず神のさばきという結果が伴うことを重ねて教えている。しかしそのさばきを食い止める救いのあることも今日の箇所は教えている。それは思いもよらない方法であった。

へびにかまれて多くの民が死に、また死につつあったとき、民は主がへびを取り去って下さるようにモーセに頼んだ。そしてモーセが祈ると解決の道が示された。しかしそれは民の願いどおりではなかった。へびにかまれて今や死のうとしている民に対して主が示された救命の方法は、竿の上に掛けられた青銅のへびを見上げることだけであった。見上げるだけで命が助かった。思いもよらぬほど簡単な方法である。またなぜ青銅のへびなのかという説明もない。ここには魂の救いのイラストレーションがある。イエス様は言われる、「ちようどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」(ヨハネ3・14)、つまり主は青銅のへびはご自分のことであり、この蛇が竿に上げられたように、自分も十字架に上げられなければならないと言われた。それは十字架を見上げた者、つまり主を信じた者が、すべて永遠の命を得るためである



と主の言は続く。

## 二、見上げるだけで救われる

何かを見上げることには何の努力も要らない。頭を上げればいいだけだから。その場合、深遠な十字架の奥義がわからなくてもよい。何か啓示的な出来事が発生しなくても、感情的な高揚が伴わなくてもよい。ただ神に自分自身をお任せしますと明け渡せばよいことである。日本人の宗教性から言えば、神・罪・救いという三段論法よりも、まず生けるキリストご自身を受け入れるように勧めたほうが効果的かもしれない。その場合、「イエス様を信じませんか」という表現は頭脳に働きかけるので、それよりも「イエス様を心の支えにしませんか」とか、「イエス様を心の拠り所としませんか」とか、「イエス様に人生をお任せしませんか」というほうがしっくりくるかもしれない。実際、キリストの十字架が自分の身代わりであるということ、青銅のへびがなぜ救いの道につながるのか頭では理解できないのと同じところがある。高校入試に合格したからと言って、入学式までに高校の授業内容を理解している必要はないように。

いずれにせよ、救いに導くハードルは高く上げないほう

がよいし、いたずらに難しくしないほうがよいだろう。なぜなら（仰いで、それを見るならば生きる）からである。導いたほうも相手が受け入れたことを信じてあげる必要がある。「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」（ヨハネ12）。そしてもつと大事なのはその後のフォローであり、点よりも線である。なぜなら救いの事実と救いの確信とは必ずしも同時ではないからである。救いの事実は神の側のことだからぶれることはない。しかし救いの確信は人間の側のことだからぶれることがある。そこに他のクリスチャンの出番がある。飛行機が滑走し、離陸し、上昇し、巡行するまで操縦士と管制官とのやり取りは途切れない。新しいクリスチャンがクリストにある大人として成熟するように、できれば一対一で他のクリスチャンが関わるのが望ましい。そして今度は育てられた人が新しいクリスチャンに関わるのである。そういう育成の連鎖が起るならば、マタイ28章の大宣教命令にかなうのではないか。

## 結論

十字架を見上げるだけで救われるという単純かつ簡潔な真理を受け取り、他の人に受け取っていただく。

## 研究資料

(小平徳行)

イスラエルの民は、これまで荒野で何度も食物についてつぶやいてきた(出エジプト16章、民数記11章)。ここはイスラエルの民が食物についてつぶやき、エジプトの食物にあこがれた最後の記録である。またここにキリストによる罪の贖<sup>あがな</sup>いの福音が予表されている。

## テキスト

4 民は、本来ならば北上すべきなのに、カデシユから紅海の道を南進し、アカバ湾に向かった。これは砂漠への道である。堪えがなくなつた直訳すると「魂は短くされた」となる。「短い魂」を持つとは、我慢できない、気持ちを抑制できない、自制を保てないこと、さらには徹底的に勇気がくじかれることを意味する。民は思うように進むことができないいらだちや、失望落胆の中にあつた。ホル山でアロンが死んだことも大きな影響を与えたであろう。彼の死は自分たちの死をも意識させるものであつた。

5 民は神とモーセとにむかい、つぶやいて言ったモーセに不平を言うことは、神に対して反抗すること

ある。**粗悪な食物** これは神が毎日供給しているマナであつた。食べ物がほとんどない荒野で、このマナによって養われてきたにもかかわらず、民は神に感謝をせずに、不平不満を漏らした。またこのマナは、天よりのまことのパンであるイエス・キリストを予表するものでもあつた(ヨハネ6・48～51)。私たちも救いの恵みを感じせず、恵みに慣れてしまうならば、天からのまことのマナである御言葉や説教、祈りなど、神につける事柄が味気なくなり、飽きてしまう危険がある。

6 民のつぶやきは主の激しい怒りを引き起こすことになつた。**火のへび** この蛇にかまれると焼けつくような痛みと激しい毒のゆえにこう呼ばれたのであろう。または、その地方の毒蛇に見られる、燃えるような赤い斑点、あるいはそのうろこに陽が当たるときらきら輝くことから、このように呼ばれたのかもしれない。

7 **どうぞへびをわたしたちから取り去られるように主に祈ってください** イスラエルの民は、自分たちに襲いかかった災いが、神からの厳しい処罰であることに気が付き、自分たちの罪を悔い改め、モーセにとりなしを懇願した。

8 火のへびを造って、それをさおの上に掛けなさい。

すべてのかまれた者が仰いで、それを見るならば生きるであろう。蛇はイスラエルでは忌むべきもの、汚れたものであり、罪を象徴するものであった（創世記3章、レビ11・41～43）。主の答えは、民が求めたこと、つまり蛇を取り去って、これ以上かまれる者が出ないようにということとは違い、かまれた者が生きるというさらに勝る道であった。それと共に、ただ問題の解決を与えたのではなく、民の信仰、従順を求められた。ここに、つぶやく民に対する深いお取り扱いを見ることができ。つぶやきは結局のところ、神の約束への不信仰から来る。この時、約束通り、仰ぎ見た者が生きることを通して、民は神の御言葉には間違いがないことを知ることになった。神は、イスラエルの民のうちから蛇を取り去る以上に、内心の不信仰を取り除かれたのである。

9 すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた。青銅の蛇自体に救う力があつたのではなく、神の約束を信じて仰ぎ見た信仰に対して神の救いのわざがなされた。この青銅の蛇は保存されていたが、ある時点で、イスラエル人はそれを偶像に変え、ネホシタ

ンと呼び、その前に香をたくようになった。そのため、ヒゼキヤ王が宗教改革の手始めとして、これを打ち砕いた（列王下18・4）。

この青銅の蛇はイエス・キリストの型である。イエスはご自身が高く上げられることについて、この出来事に言及している（ヨハネ3・14）。十字架につけられ、高く掲げられたイエスを信仰によって仰ぎ見るとき、罪と死から救われるのである。民は青銅の蛇を仰ぐことによって、自分の罪の恐ろしい実態を悟ったことであろう。青銅の蛇が上げられたように、イエスは罪を象徴する蛇として十字架にかかってくださった。このことにより、罪なき神の子イエスが、罪とされ、私たちのためにのろいとなってくださったのである（ガラテヤ3・13）。それは私たちがキリストにあつて神の義となるためであつた（Ⅱコリント5・21）。

参考図書 田辺滋『民数記』『新聖書注解・旧約Ⅰ』（いのちのことば社）、石黒則年『民数記』『実用聖書注解』ゴードン・J・ウェナム『ティンデル聖書注解・民数記』（いのちのことば社）、W・リガンズ『デイリースタディーバイブル・民数記』（新教出版社）、他。

## 聖書

民数記21・4～9

## タイトル

ホントにこれで救われるの？

## 暗唱聖句

すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた。民数記21・9

## 目標

キリストを信じ仰いで、救いを受ける。

## 導入

(和田 治)

「皆さん！ここに千円札があります。欲しい人にプレゼント！欲しい人は手を上げて！」シーン…。「まさか」「うそでしょ…」。だって、お金がもらえるようなこと、何にもしてないのに、千円ももらえるはずないって、皆思ったのです。とその時、小学二年生のまさと君が「はい！」って手を上げました。すると先生はなんと、「どうぞ。約束通り上げましょう」だって！まさと君は大喜び！皆さん、良いものをもらえるって時、その方法が簡単過ぎると信じにくいですよ。今日は、私たちが神様からもらえる一番素晴らしいものを、びつくりするほどとっても簡単な方法でいただける、というお話です！

## 火の蛇

覚えていますか？荒野を進むイスラエルの民に、おい

しくて素晴らしい食べ物を神様が天から降らせてくださったって、みんなを養われたこと。何と言う食べ物でした？そう、「マナ」でしたよね。最初は神様に感謝していたはずなのに、やがて文句ばかり…。神様は幾度か、そんな民を正すために、お叱りになったのでした。でも、モーセのお兄さんのアロンが死んでしばらくした頃、彼らは今までになかったほどひどく、神様に文句を言ってしまったのです。モーセに向かって言いました。

「何の恨みがあつて、おれたちをエジプトから連れ出し、こんな荒野で飢え死にさせるんだい？食べ物も飲み物もありやしない。あんなまずいマナはもうたくさんだ！」ええっ？それはないでしょ？さすがに神様もかんかんにお怒りです。罰として、神様が「火の蛇」を送りました。その毒蛇にかまれると、もう、火で焼かれているかと思うほどのものすごい痛み！ばったばったとたくさんの人々が死んで行きます…。

## 青銅の蛇？

人々は困り果て、モーセに泣きつきました。「救ってください。私たちが間違っていました。お願いですから、毒蛇がいなくなるよう、神様に祈ってください」。モーセは

祈りました。すると神様がモーセにおっしゃいました。「火のへびを造って、それをさおの上に掛けなさい。すべてのかまれた者が仰いで、それを見るならば生きるであろう」。すぐにモーセは青銅（オリンピックの銅メダルのもとになっている金属に似ています）で蛇を造って、さおの先っぽに取り付けて高く上げました。遠くの方からもその蛇が見えます。「みんな、これを見ろー！」あらふしぎ！ただその蛇を仰ぎ見ただけに、死にそうだった人たちの身体から毒がすーっと引いて、みるみる元気になるではありませんか！「た、た、助かったー！」

### イエス様を見上げよう

青銅の蛇に特別な力があつたのでしょうか。そうではありませんね。「この蛇を見上げると生きる」、というのが神様のご用意くださった癒（い）しの方法でした。ただ見上げるだけで命が助かったのです。ひょうしめけするほど簡単な方法でしょう？ 誰でもできることですよね。

皆さん、これは私たちが救われる方法とすつごく似てゐるんです。イエス様はおっしゃいました。「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」。イエス様は「青銅の蛇は私のことだ。こ

の蛇がさおに上げられたように、私も十字架に上げられなければならない」と言われたのです。イエス様は十字架に釘づけにされ死なれました。そして死を打ち破ってよみがえられました。十字架のイエス様を見上げる人、今も生きておられるイエス様を救い主として信じる人は、毒蛇の毒が消えたように全ての罪が赦（ゆる）されるのです！

### まとめ

クリスチャンホームに生まれた献太君は、赤ちゃんの頃から教会学校に通っていました。あるキャンプで先生から「いつ救われたか分からないっていうお友だち、それも恵みなんですよ！」って聞いてびっくり！ 小さな頃からイエス様を本当の救い主と信じ、何度も「イエス様を信じる人は手を上げて！」と言われて手を上げてきました。だから、「いつ救われたの？」って聞かれてもはつきりわからず、もしかして救われてないかも…と思うようになっていたのです。「良かった、救われているんだ！」イエス様を信じた人はその時にもう救われています。だって、それが神様が定められた確かな方法なんですから。だから、疑わないで心から感謝しましょう！

♪ワン・ウェイ♪（GS10）

# 聖書 イザヤ7・1～17 テーマ インマヌエル預言

## 序論

(石田高保)

ここは有名なキリスト降誕を預言した個所でアドベント(待降節)によく用いられる。しかも預言者イザヤが記した時代は、そのことが実現する七百年あまり前であった。マタイはこれを引用して、イエス様の誕生こそその預言の成就であると言明している(マタイ1・23)。これによって神のご計画は決して泥縄式でも思いつきでもなく、その実現は確実でしかも遠大であることを教えられる。

## 一、インマヌエルの存在

イザヤの預言はこうである。おとめ、つまり彼の妻がみごもり、やがて男の子を産み、その子が物心つく前に、スリヤ・エフラ임連合軍は敗れ、イスラエル王国は守られるから、恐れるなど。この預言は重層的で、究極的にはやがて生まれる救い主についてのものである。(その名はインマヌエルとなえられる)。これをマタイは「これは、『神われらと共にいます』という意味である」

(マタイ1・23)と説明している。これは救い主にインマヌエルという名前が付けられるということではなく、インマヌエル「神われらと共にいます」という存在になって現れて下さるということである。実際のところ、主を受け入れたら、神が共におられることが腹でわかってくる。イエス様が神でありながら人となって生まれて下さった目的は、私たちと共にいて下さるためである。主は十字架にかかって私たちの罪を贖<sup>あがな</sup>って、救いを完成し、復活して天に昇られたが、聖霊という見えない形で私たちと共にいて下さる。天上にだけおられるのでも、教会堂にだけにおられるのではなく、家庭、職場、買い物先、運転中、ありとあらゆる場所では主は共にいて下さる。そして私たちをおしてご自身をこの世に現し、共に働いて私たちの隣り人を救いに導こうとしておられる。そのためにも永遠に共にいて下さる神である。マタイ福音書は、インマヌエルで始まり、インマヌエルで終わると言われる。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28・20)。この事実によって私たちは寄る辺のない不安や孤独を克服することができる。



## 二、インマヌエルのご生活

クリスマスとは、別な観点から言うとき地球が天から救い主を受けた日である。これほどの歴史の大事件を、はじめは誰ひとり気づかなかった。御使によって教えてもらわなければ人間には分からなかったのである。イザヤは預言した、〈見よ、おとめがみごもって男の子を産む〉と。この言葉を御使は8世紀後に引用し、マリヤの夫ヨセフに告げている。「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」(マタイ1:21)。救いというのは日常の言葉に直せば「人生の解決」ということになるだろう。クリスマスとは、人生の解決をしてくださる方が天から来てくださった日である。生理的なプロセスとしては、主はマリヤの体内に聖霊によって宿り、月満ちて赤ちゃんとして生まれてくださった。この方はやがて成長して30才のとき神の国を宣べ伝え、33才のとき十字架にかけられて死なれた。これによってイエス様は私たちの罪を取り除くことのできる道を開かれた。つまり人生に解決のあることを明らかにされたわけである。神の子キリストは死ななければ私たちを救う

ことができなかったとは、実に痛ましいことである。

しかしここにはイエス様の復活のことも暗示されている。〈その名はインマヌエルとなえられる〉、主は復活して、より頼む者といつでも一緒にいてくださるようになる。と預言されている。裏返せば、いつも共にいて下さるからには、死から甦ったことが大前提になるのである。インマヌエル信仰はそれ自身が復活を証明していることになる。あらゆる証明の中で最も強力なものである。しかもあらゆるクリスチャンが自分の言葉と体験で証明することができる強みがある。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル7:25)。いつでも救い主であられるということである。

## 結論

私たちはイエス様を受け入れたという瞬間において救われたが、その方が共にいて下さることをいつでも確認できることは継続的な救いである。私たちはインマヌエルの存在として、インマヌエルの祝福について身をもって証しして行こう。



## 研究資料

(小平德行)

この箇所はキリストの処女降誕の預言であるが、この預言は、当時の具体的な危機的状況下でなされたものである。時はユダの王ヨタムが死に、アハズが即位して間もなくのことで、BC 734年と推定される。

## テキスト

1 エルサレムを攻めたが勝つことができなかった序文であり、物語全体を包括している。当時、アッスリヤの脅威にさらされ、圧政に苦しんでいたイスラエルとスリヤは、ユダと共に三国同盟を結んでアッスリヤから独立しようと計画した。ところがアハズがこれを拒否したため、スリヤとイスラエルの連合軍は、エルサレムに攻め上り、アハズを滅ぼそうとしたのである。

2 エフライム イスラエル王国のこと。ヨセフの子から出た部族名であるが、初代の王ヤラベアムがエフライム人であったことから、イスラエルの代表名に用いられるようになった。

3 シャル・ヤシュブ 「残りの者は帰って来る」の意味で、神の徹底的なさばきと、その後の一方的な恩寵に

よる救いを象徴している。イザヤはこの名を持つ息子を連れて王の前に立つことにより、彼のメッセージの中心を思い出させようとした。布さらしの野へ行く大路に沿う上の池 エルサレム城外の東側にあった。布をさらすためには大量の水を必要とし、ソーダと灰あじくのため悪臭を伴うので、城外の水路で行われた。ここにギホンの泉と呼ばれる地下からの間欠泉があり、それが上の池と下の池に分かれて流れて行く。水の少ないエルサレムにとつて籠城のために水源確保は絶対不可欠であった。アハズはその調査のために、ここに来ていたのであろう。

4 気をつけて、静かにし、恐れてはならない これは旧約聖書を貫く重要なメッセージである。気をつけて「見守る」(ハシャーマル)から派生した語で「注意する」「心に留める」の意味。つまり真の助けはどこからくるのかに意識を集中させよということ。静かにし「休む、横たわる」(ハシャールカト)から派生し、「落ち着く、静かにする、黙る」の意味(イザヤ30・15)で、神に絶対信頼を置くことによって与えられる心の平靜さ、落ち着きを持つようということ。恐れてはならない この言葉の背後には、エジプト脱出時、絶体絶命の状況下で主

がモーセを通じて命じた言葉がある(出エジプト14・13)。イスラエル人は、これまでに、何度となく危機的な状況に直面しては、この言葉を聞いてきた。そしてその度に彼らは信仰の原点にかえり、生きて働かれる神に信頼するよう励まされたのである。

6 タビエルの子 だれのことかは分からない。

9 エフライムのかしらはサマリヤ、サマリヤのかしらはレマリヤの子である この後には、次の言葉が続くことが予想される。「ユダのかしらはエルサレム、エルサレムのかしらはダビデの子(アハズ)、そしてダビデの子のかしらは主なる神である」。

11 しるしを求めよ これは「神に信頼せよ」とほとんど同義であるといえる。主アハズの信仰を励ますためにしるしを求めるよう命じた。しるし(ヘ)オース)は、あることが必ず成就することを証明する出来事。

12 アハズ王は主の命令を体よく断つた。彼は直面している危機を克服するのに、神の助けを必要とせず、自力で解決できると考えていた。それはスリヤ・エフライムに対抗するためにアッスリヤと手を結ぶことであった。彼は申命記6・16から引用して、いかにも敬虔らしく断つ

ているが、その背後には不信と罪を悔改めようとはしないかたくなな心があった。

14 おとめ(ヘ)アルマー) 聖書では九回用いられているが、既婚女性の例は一つもない。これ以外に「処女」を表す言葉があるが、結婚した女性についても用いられている。ゆえに、この語が使われているのは、処女であることの強調のためであるといえる。また、この「おとめ」が誰のことを指しているのかについては諸説あるが、

特定できない。インマヌエル 「神、われらと共にいます」の意味。この男の子の誕生は、神が保護者としてユダの国と共にいますことを意味する。この究極は神が人となられたこと(受肉)である。この預言は、イエスの奇跡的誕生(処女懐胎)において完全に成就した(マタイ1・22・23)。

15・16 凝乳と、蜂蜜 これは貴重な食物であるが、アッスリヤ軍によって国が荒廃し、農耕生活を営めなくなった結果である。

参考図書 鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書注解・旧約3』(いのちのことば社)、樋口信平『イザヤ書Ⅲ注解1』(一粒社)、他。

## 聖書

イザヤ7・1～17

## タイトル

良きおとずれの約束

## 暗唱聖句

見よ、おとめがみごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルとなえられる。

イザヤ7・14

## 目 標

困難の中にも共におられる神に信頼する者となる。

## 導入

(松浦みち子)

「あれっ？ いつもと様子がちがうな。」「そう、今日からクリスマスをお待ちのアドベントが始まったのよ。」

クリスマスツリーも素敵に飾られ、アドベントクラウンの4本のろうそくの1本にも火が灯りました。4本全部灯ったらクリスマスですよ。楽しみですね。さあ、みんなクリスマスを迎える心の準備をしましょう。

## 大変な時代

いまから二七〇〇年ほど前のイスラエルの国の出来事です。この国は、信仰深いダビデ王によって国造りがされましたが、ソロモン王の死後、国は二つに分裂し、北イスラエル王国とエルサレムを首都とする南ユダ王国に

なっていました。かつて神様の祝福によって栄えた国がどうしてこのようなことになってしまったのでしょうか？ それは、まことの神様から目をそらせ、石や木で作った偶像を拝み、勝手なことばかりして国中に悪が満ちたため、まことの神様のさばきが下されたのです。

国同士の争いが続く大変な時代に、預言者イザヤは神様のおことばを人々に伝えました。そのころ、南ユダ王国は隣の国々からはさみうちのように攻撃を受けることになったのです。人々はひそひそささやき合いました。「戦争になったらどうしよう！」「いつ攻めてくるのだろうか？」怖くて怖くて、夜もろくろく眠れません。アハズ王の心も国中の人々の心も、森の木々が風に吹かれて揺れ動くように不安でいっぱいでした。

## イザヤの預言

あわてふためくアハズ王のもとに神様は預言者イザヤを遣わしました。「イザヤ、あなたは息子シャル・ヤシヤと共に出て行ってアハズに会い、わたしの言葉を告げなさい」と。イザヤはさっそく出かけました。その時、アハズは戦争が始まって国が包囲されても水を確保できるように水源地の視察に赴いていました。その貯水池の側

でイザヤは預言したのです。「氣をつけて、静かにし、恐れてはならない」と励ましました。たとえ敵がエルサレムを攻めてきても、彼らは燃え残りのくすぶっている切り株のようなもので、まもなく力尽きてしまうからと。

なんと力強い励ましのおことばでしょう。神様はアハズ王に具体的に65年のうちに敵国は敗れ、消滅してしまうと約束し、それを信じないならば、あなたがたは立つことはできないとおっしゃいました。そして、神様はアハズ王に、この約束が確かであることを保証する「しるし」を求めるよう命じられました。ところがアハズは「わたしは、それを求めて、主を試みるようなことはしません」と、一見敬けんそうなことを言って、主の命令に従いませんでした。なぜならアハズは、連合軍が攻めてくることを知って、当時勢力を伸ばしていたアッスリヤに金銀の贈り物をして助けを求め、確約を得るところにこぎつけていたのです。アハズは見えない神様よりも、大國に依存する方が得だと考えていたのですね。

### 主みずからの一つのしるし

イザヤは、不信仰なアハズを非難し、「あなたは、人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、神にもどか

しい思いをさせるのか。神の約束の実現のしるしとして、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる」と言いました。神様は、人々が暗い気持ちで悲しみ悩んでいるのをごらんになり、「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。」と語られたのです。人々は「えっ、なんだって！まだ結婚していない女の人から男の子が生まれる？」その名は『インマヌエル』と言ってね、神様がいつも一緒にいてくださるというしるしなんだよ。「それじゃあ、私たちを助けてくれる救い主なんだ、うれしいね。早く来て下さらないかなあ」。人々はとても喜びました。

イザヤが預言した男の赤ちゃんとは、誰のことでしょう。イエス様です。イエス様の誕生は70年も前から預言され、時が満ちて実現されたのです。

私たちは明日のことさえわかりませんが、神様は遠い未来のこともちゃんとご存じです。約束を必ず実行して下さる神様は、あなたの将来についても計画を持って導いてくださる方です。主に従って歩んでいきましょう。

♪しゅにしたがうことは♪（コ改19、こ53、ホ87他）

# 聖書 イザヤ9・1〜7 テーマ 救い主誕生の預言

## 序論

(金井信生)

イザヤによつて七百年以上も前から預言されていたキリストの誕生は、神の救いのご計画の実現でした。

## 一、大いなる光の到来

イスラエルの国はソロモン王の後に、北王国イスラエルと南王国ユダに分かれました。以来、周辺の大国からの圧迫に苦しめられ、もともと四国ほどの大きさしかない国が、さらに領土を失っていきます。ついに北王国イスラエルはアッシリヤに滅ぼされ、住民は捕え移されてしまいました。

神の民が、今光を失つて暗やみの中にいます。しかしイザヤは、神がご主権とあわれみをもつて、救い主を送り、くびきから解放してくださいることを預言します。

「くびき」は敵に負わせられています、もとは神の民が教えに聞き従わなかったからです。神の祝福よりも周辺の国々の繁栄をうらやみ、多くの偶像を導きいれま

した。その結果、虚栄や偶像礼拝のために重荷が加わり、自分から負わなくてもよくくびきを負ってきたのです。

ですから、大いなる光とは、ただ敵が追い払われたり、領土や繁栄が取り戻されることだけではありません。神に背いて暗黒のうちにいる人の心の中に差し込む、恵みの光、命の光です。神を見失っていた人々を、神に立ち帰る道に導く光です。

## 二、みどりの誕生

救い主は、みどりごととしてこの世に来られます。英雄や超人ではありません。あえて無力な姿をもつて来られるのは、人口の多さや領土の広さ、また経済的な繁栄や軍事力の大きさに目を奪われやすい私たちに、ただ神に頼る信仰を呼び起こさせるためです。実際にイエスは、ただみどりごととしてだけでなく、ベツレヘムの家畜小屋で飼ひ葉おけに生まれてくださいました。

イザヤの時代に前後して、北にはアッシリヤやバビロンが興りました。また南ではエジプトが盛衰を繰り返しながらも、常にイスラエルに影響を与えています。みな強大な力を誇り、イスラエルを踏みにつけてきました。

歴代の王たちも、いつも周辺の国の顔色をうかがっていました。

しかし、神がひとたび乗り出されれば、人間の力は何ほどのこともありません。7章で「インマヌエル（神われらと共にいます）」と名付けられる男の子の誕生が預言されています。人の目に映るものではなく、神が共におられることの平安と幸いを、みどりごの存在はわたしたちに教えています。

みどりごの名が四つ、ここに記されています。全知全能であり、自ら完結しておられる神の姿です。そしてこの神が私たちの父として責任と関わりを持つとうとしておられることを示します。その目的は平和の実現です。

### 三、神の平和の実現

救い主が世に來られる大きな目的は、平和の実現です。まず、罪の赦し<sup>ゆる</sup>によって神と人の関係が回復されます。偶像やこれを慕う心<sup>こころ</sup>が取り除かれ、神の恵みに満たされることによって、人と人との争い<sup>しず</sup>が鎮められていきます。ただイスラエル一国の救いと平和だけでなく、世界的な平和の実現です。

世に來られたキリストは、上に立つお方ではなく、人々に仕え、一人一人を愛して声をかけられました。神と一人の関係が正しくされることによって、神の国がこの世に広がっていくためです。

神の救いの計画が実現されるのは、神ご自身の熱心があるからです。今も神は同じ熱心をもって私たちに臨んでおられます。

この熱心は、正義が曲げられていることへの義の怒りと、小さな者が失われ、滅ぼされそうになっていることへの深い愛からでています。神の熱心が働き出すとき、人間の不信や抵抗は吹き飛ばされてしまいます。まず私たちが神のご計画に立つて、イエス・キリストを救い主と信じましょう。「やみがなくなる」「光栄を与えられる」「喜びを大きくされる」、これらの言葉が実現していきます。

### 結論

神が私たちのために計画し、この世に生まれさせてくださった救い主キリストを信じましょう。



## 研究資料

(中島啓二)

神に背を向け、さばきを警告されても悔い改めようとせず、かえって「神をのろ」(8・21)った北イスラエルは、ついに「暗黒に追いやられ」(8・22)るに至った(大半の領土喪失と捕囚)。今やイザヤの子らの名に込められた預言のうちの一つ「マヘル・シヤラル・ハシ・バズ(分捕物は素早く、獲物はさっと持ち去られる)」(8・1)が成就した。しかし「暗やみ」(2)の中にもイザヤは「大いなる光」(2)を見た。預言の一つが成就したならば、もう一つの「シヤル・ヤシユブ(残りの者は帰って来る)」(7・3)も必ず成就すると確信していた彼に、神は「インヌエル」(7・14)に続く、新しいメシヤ像(6・7)をお示しになったのである。

## テキスト

1 **ゼブルンの地、ナフタリの地** これらの地(後述のメギドに該当)は、BC 734～732年のアッシリヤの侵入(列王下15・29他)で最大の打撃を受けた地域であった。すなわち反アッシリヤの動きを見せた北王国に対し、テグラテピレセルは、その地を含む北王国領土の大半をアッ

スリヤに併合し、一部住民を捕らえ移したのである。残されたのはサマリヤを中心とした丘陵地帯だけであり、アッシリヤに併合された地域は、ドル、ギルアデ、メギドという行政区に分けられた。そのそれぞれが **海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ** に該当する。マタイは、イエスのその地域での宣教活動が、預言の成就であることを示している(4・12～17)。

2 **大いなる光** 第一義的にはアッシリヤの圧政からの国土と民の解放を意味するが、預言が究極的に指し示すものは、言うまでもなく罪の支配からの人類の解放と、その解放をもたらす救い主である。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(ヨハネ1・9)。見た **：照った** 預言者の完了と呼ばれ、預言書によく見られる。実際は将来のことであるが、預言者の目には既に起こったことのようにはつきり見えているのである。

4 **くびき** 発掘されたアッシリヤの碑文では、他国を征服することを「アシユル(アッシリヤの神)のくびきを課す」と表現している。**ミデアンの日** 10・26に「むかしミデアンびとをオレブの岩で撃たれた時」とあり、ギデオンと300人の精鋭による戦い(士師7章)を指すと



考えられる。それは人間の力によらず、神の力に徹底的により頼んだことから与えられた勝利であった。アッスリヤからの解放も、それが究極的に指し示す人類の救いも、全く神のみわざとして行われることなのである。

**5 歩兵のはいたくつ** アッスリヤ兵は革製の編み上げ靴を装備していた。**血にまみれた衣** テイル・バルシブ遺跡の壁画によると、アッスリヤの軍服は赤だったようである。その色と戦いの悲惨さの両方を表現しているのかもしれない。軍靴や軍服が排除されることは、神の勝利が完全な平和をもたらすことを象徴的に示している。

**6 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた** 「おとめがみごもって男の子を産む」(7・14)と預言されている男の子を指す。その子は他でもなく、「われわれのために」お生まれになるのである。**靈妙なる護士** 「不思議な助言者」(新改訳)。古代オリエントでは王に助言を与える議員がいたが、この方は王であり同時に助言者であられる。言い換えれば助言者を必要としない王である。**大能の神** 救い主が神ご自身であるという驚くべき預言。**とこしえの父** 「父」は神のその民に対する関係を指す(詩篇103・13参照)。救い主はご自身の民にとって

あわれみに満ちた保護者であられる。**平和の君** [へ] シャロームは平和の意で、健康、平安、健全、安全といった、欠けるところのない十全性を意味する。救い主はそのシャロームの状態を、神と人との間に樹立してくださる。するとそのシャロームが人と人との間、さらに個人の生活の中にも成立していくのである。

**7 ダビデの位に座して** 救い主はダビデの子孫として生まれるとエレミヤも預言した(23・5・6)。その通りイエスは、ダビデの末裔であるヨセフの子として誕生された(マタイ1・1)。**万軍の主の熱心がこれをなされるのである** 人間的な目で現実を見るならば、イスラエルの回復、さらにそれが指し示す究極的な人類の救いは実現不可能に思える。しかし神の率先と神の熱心によってなされるならば、必ず成就するのである。それは人間的な知恵や国家間の同盟に期待し、神により頼むことなく滅びを招いたことへの反省と警句でもある。「神には、なんでもできないことはありません」(ルカ1・37)。

**参考図書** 注解書 鍋谷堯爾(新聖書注解・旧約3)、J. Oswalt (NICOT), J. Watts (Word), その他 The IVP Bible Background Commentary: OT.

## 聖書

イザヤ9・1-7

## タイトル

預言されたメシヤの誕生

## 暗唱聖句

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。

イザヤ9・6

## 目標

私たちのために生まれた救い主キリストを信じる。

## 導入

(水野晶子)

赤ちゃんが生まれてくるのを待つことはとてもうれしいことです。肌着やベビードレスを用意し、ベビーベッドに枕や布団、どれもうかわいいですね。ある教会では赤ちゃんが無事生まれてくるのを祈りするベビーシャワーのとき、紙おむつを丸めてデコレーションケーキのように飾って、プレゼントします。それは赤ちゃんの誕生をみんなで期待し待っているからです。

聖書には七百年も前から生まれることが預言されていた男の子がいました。いったいどんな人なのでしょう。

## 大いなる光として来られた方

昔、イスラエルの国は、北王国イスラエルと南王国ユ

ダに分かれてしまいました。イスラエルの人々は真の神様を忘れ、人間が作った偽りの神様を拝み、政治もでたらめで、周りの国々から脅かされ、人々も悪いことを平気でするようになっていました。ついに、アッシリアという大きな国が攻めてきて、滅ぼされ、民は連れ去られたのです。神の民は真つ暗闇の中に突き落とされました。

しかし、神様は神の言葉を伝える預言者イザヤを通して、暗闇の中にいる人々に大いなる光となる救い主が与えられることを知らせました。神様に背いていた人々の心は真つ暗でした。その心に差し込む恵みの光、命の光となり、神様を見失ってしまっている人々に神様に立ち返る道を示す光なのです。この光こそイエス様のことです。しかもあたたかみすでに生まれているかのように七百年も前に約束されていました。

## すばらしい救い主

私たちを苦しみや悲しみから助け出してくださいる救い主はアニメのヒーローのように登場したのでなく、神様でありながら、ひとりのみどりご(赤ちゃん)として、しかも家畜小屋の飼葉おけの中に生れてくださいまし

た。小さな赤ちゃんですが、この方は「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」であるとイザヤは伝えました。四つの違った名前前で救い主がどういう方でどんな力を持っている方なのか教えました。それは、①私たちが困ったとき、どうしたらいいかわからない時にこうすればいいよと教えてくださる方。②人間にはできない奇跡やすばらしい働きをする神様。③お父さんのように私たちを子どもとして守って、いつまでも愛してくださる方。④人を憎んだり、けんかをしてしまう心を愛の心にしてくださる方なのです。

この救い主によってイスラエルの国だけでなく世界の国々に救いと平和が届けられました。

### 例話とまとめ

あるトンネルの工事で、入り口から少し入ったところで土が崩れ、生き埋めになってしまったことがありました。ところが八日目にみんな助け出されたのです。それはリーダーがしっかりといてみんなを励まし、外から来る救援隊を待っていたからです。真っ暗な中で、お腹はすくし、息苦しいし、いつ助けられるかわからないので、いつそ死んでしまいたいと言いつつも出てきまし

た。そのときリーダーが、「今、私たちが土の下敷きにならないで生きているということは、神様が守っていてくださるからだ。自分勝手に死ぬなんて言うことは、今私たちを生かしていてくださる神様に申し訳ないことです。神様を信じなさい」と叱り<sup>しか</sup>ました。そんなことがたびたびあって、とうとう八日目に外から救援隊が土を掘ってきて、ボカッと最後の土が取りのけられ、外から光が真っ暗だったトンネルの奥にキラッと差し込みました。生き埋めになっていた人たちは、その光を見た時、思わず「バンザイ」と言って抱き合って泣きました。光を見たことは、もう救われたと同じことでした。それは、外から崩れた土を破って救援隊が到着したからでした。

(キリスト教例話集より)

神様は罪ゆえに、滅びるしかなかった私たちを、トンネルの救援隊のように、ひとり子イエス様を送り、救い出してくださいました。このアドベントの時に、まだ、暗闇の中にいるお友だちに救いの光を届け、大きな喜びと平和を与える救い主イエス様を信じましょう。

♪主がついていけば、天のひかり♪ (PW12)

# 聖書 マタイ1・18～25 テーマ ヨセフへの告知

## 序論

(金井信生)

キリストとは「救い主」という意味ですが、イエスは  
その教えや奇跡、あるいは十字架の死や復活によって救  
い主になられたのではなく、初めから救い主として生ま  
れた方です。

## 一、救い主としての誕生

ヨセフは、婚約していたマリヤが身重であると聞いて、  
〈ひそかに離縁しようと決心〉しました。しかし、主の使  
はヨセフに、マリヤの〈胎内に宿っているものは聖霊に  
よるのである〉ことを告げました。また、〈その名をイエ  
スと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの  
罪から救う者となるからである〉とも告げます。

「イエス」という名前自体は、旧約のヨシヤを受け  
継ぐもので、「主は救い」という意味です。当時はありふ  
れた名前の一つであり、救い主の到来を待ち望む思いを  
込めてつけられていました。

しかし、御使いの言葉は、親の願いを込めて生まれた  
者や、人の期待を受けて誰かが救い主になるのではなく、  
神の御計画の中で救い主がこの世に生まれることを示し  
ています。

この章の初めの系図にあるように、人は誰でもアダム  
以来受け継がれてきた、命の系譜の中に生まれてきます。  
しかしキリストは聖霊によって、つまり神の特別な働き  
によって生まれてくるのです。ヨセフは旧約の信仰者た  
ちにならない、自分の思いを置いて神のなさることに委ね  
従いました。

## 二、罪からの救い主

旧約時代から待ち望まれていた救い主は、大国に圧迫  
され、支配されることの多かったユダヤ人にとって、独  
立を回復する政治的な王として期待されていました。ま  
た、半分異邦人の血が入っているヘロデ王ではなく、ダ  
ビデ王の子孫が王となり、国中が神を畏れるようになる、  
宗教的な国家の確立を期待する人たちもいました。

しかし、主の使は救い主を〈おのれの民をそのもろも  
ろの罪から救う者〉と呼んでいます。ユダヤ人は神の民  
と自称していても、神の目からは罪ある存在です。自分

が神の前に清いのか汚れているのか、神との関係が正しくあるのか、きちんと解決されていないのに、自分の思いを神の前に押し通そうとしていました。

もちろん、ユダヤ人だけに罪があるわけではありません。ユダヤ人は全世界の人々のモデルとして、まずまことの神を知る民とされました。世界中のすべての人が、神に対して同じように罪がありますから、キリストは全人類に対して「罪から救う者」と呼ばれているのです。

また、系図の中にすでに人間の罪が見え隠れしているように、普通の誕生では罪の中に初めから生まれているので、罪から救うことができません。聖霊による誕生は、私たちを罪から救うために、罪と無縁の方が罪の世に生まれてくるための特別の手段でした。

### 三、われらと共にいます

23節には、「イエス（主は救い）」と名づけられたのは、「その名はインマヌエル（神われらと共にいます）」と呼ばれるであろう」とのイザヤ書の預言の成就であると説明しています。罪から救われた者は、神が共におられることを喜ぶ者へと変えられるのです。

罪とは、神を忘れて自分の思いに従う心そのものであ

り、またその心のままに歩む生き方です。その結果、過ちや傷を繰り返すだけでなく、神との関係が断ち切られています。

罪から救うために生まれたキリストは、やがて十字架にかかって全人類の罪を身に負って死なれます。これは神の愛と、完全な罪の赦し<sup>ゆるし</sup>が世に示されるためでした。キリストが罪を赦し、救われるのは、私たちを神のもとに立ち帰らせ、神との正しい関係に歩ませるためです。

人口調査の対象にもされない羊飼いの、異邦人の博士たちも、そして病などのために「汚れた者」と扱われて、神の存在が遠かった者にも、キリストのその姿で、言葉で、行動で、神がわれらと共にいてくださることを現されました。そして、感謝と希望をもって神を賛美する者と変えられる救いを与えられました。この救いが今の私たちにも与えられているのです。

### 結論

私たちも、救い主として誕生されたキリストを信じ、罪が赦され、神の子としていただいた幸いを心から喜ばしましょう。

## 研究資料

(中島啓一)

## テキスト

18 イエス・キリストの誕生の次第 「誕生」は〔ギ〕ゲネシス(起源、家系などの意も)。ちなみに1節の「系図」は「〔ギ〕ゲネシスの書(〔ギ〕ビブロス)」。その系図(1―17)の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。婚姻 いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係。夫、妻という表現はそのため。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に

一年ほどの期間を経て正式な結婚へと進む。その間に女性<sup>が</sup>他の男性と関係を持てば姦淫<sup>かんいん</sup>と見なされた(申命記22・23以下)。一緒にならない前に 正式な結婚へと進む前。聖霊によって身重になった 神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシスには「創世記」の意もあり、そのことが象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリヤの胎内になされたということである。天地創造のときと同じように、救いのわざなる新創造に際しても聖霊が働かれるのである。なお聖霊による受胎(18、20)の「」

によって」を表す前置詞〔ギ〕エクは、1―17節の系図においても、「ボアズはルツによるオベデの父」(5)のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことでは決していない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

19 正しい人であったので、彼女<sup>が</sup>ことが公けになることを好まず 「正しい」〔ギ〕ディカイオス)は律法に対する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリヤの姦淫の容疑を世に明かし、彼女に裁きと処罰を受けさせねばならない(石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである)。ヨセフはマリヤをさらし者にしたくなかった。とはいえ明らかに有罪と思われるマリヤを妻に迎えるならば義が通らない。その葛藤の中で到達した答が、ひそかに離縁 すること。マリヤの同意さえあれば一人の証人の前で公式に



離縁することが可能であった。このようなヨセフの葛藤の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、慈しみに富んだ隣人に対する優しさとを同時に示すものであった。

20 **ダビデの子ヨセフ** 新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけである。

21 **その名をイエスと名づけなさい** イエス(ギ)イエスは、<sup>ハ</sup>イエシュア(ヨシユアの短縮形)のギリシャ語読み。おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる。その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は、政治的な救いであったが、イエスもたらす救いは「もろもろの罪から」の救いなのである。

22 **主が預言者によって言われたことの成就するため** 神が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシヤ預言には、それが第一義的に指し示すもの(ここでは、アハズに語られた当座の救い)と、究極的に指し示すものがある。その究極の約束が、今や成就するのである。

23 **おとめがみごもって** <sup>ギ</sup>パルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の<sup>ハ</sup>アルマは「若い女性」の意。よってイザヤの預言は処女降誕を意味するのではないと主張す

る者もあるが、その預言の究極の意味での成就を記すこの箇所では<sup>ギ</sup>パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によるものと断言され(18、20)、さらにマリヤも「まだ夫がありません(直訳は、男の人を知りません)」(ルカ1・34)と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはつきりと指し示すものであると受け止めるのは当然である。インマヌエル 個人的な名ではなく、その役割を示す称号的なもの。神の御子が人となることによって「神われらと共にいます」という主の臨在が実現し、イエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章からインマヌエル(神の臨在)を語るこの福音書が、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(28・20)という臨在の宣言で締めくくられるのは偶然ではない。

25 **子が生れるまでは、彼女を知ることにはなかった** 「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いないものとする。

**参考図書** 注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), 増田誉雄(新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.



## 聖書

マタイ・18〜25

## タイトル

イエス様の誕生

## 暗唱聖句

彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。

## 目標

マタイ・21  
救い主として誕生されたキリストにより、罪赦され、救いを頂く。

## 導入

(飯田勝彦)

ローソクに3つ目の火が灯されました。いよいよイエス様の誕生をお祝いするクリスマスマスが近づいてきました。次週は、クリスマス礼拝です。

皆さんの心は、イエス様をお迎えする準備はできていますか？ イエス様は、皆さんを幸せにしたいと願っておられます。クリスマスを前にイエス様の誕生について見ておきましょう。

## 約束されたイエス様の誕生

本来に不思議なことです。イエス様は生まれる何千年も前から生まれることが約束されていたのです。それは、神様の言葉である聖書に記されています。イエス

様が誕生される約700年も前にイザヤという預言者がいました。そのイザヤが記した書物に「見よ、おとめがみこもって男の子を産む。その名をインマヌエルとなえられる」とあります。これは、イエス様のことです。

皆さんの中で「僕は700年も前から生まれることがすでに決まっていたよ」という人がいますか？ イエス様は不思議な方ですよね。

神様は、アダムとエバが犯した罪によって苦しむ私たちを救いたいと願い、イエスという人間の姿となってこの地上に、約束の通り来られたのです。神様は、遠く昔から私たちの救いのため、考えられないほどの計画を立てられました。その計画を実現するために、イエス様の誕生があるのです。

## 聖霊によるイエス様の誕生

イエス様はこの世に来られた時、最初から大人の姿で来られませんでした。イエス様は、マリヤのお腹から赤ちゃんとして誕生されました。ヨセフとマリヤが婚約をしていたとき、ヨセフはマリヤから「ヨセフさん、わたし子どもを授かりました」と聞きます。ヨセフはびっくりしたに違いありません。

当時は、結婚していない者たちに子どもが与えられることは、罪とされていました。その罪の罰は非常に重いものでした。

「どうしよう。これではマリヤがかわいそうだ」。

ヨセフは考え苦しんだゆえに、婚約を取り消し、静かにマリヤと分かれることを決意しました。

しかし、そんな中、ヨセフの夢に天使が現れて言いました。「ヨセフ、恐れないで妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤは、聖霊によって身ごもったのです」。ヨセフは、天使の声を聞いて、マリヤに宿った子どもは、神様が与えて下さったと信じました。そして、マリヤを妻として迎え入れたのです。イエス様は、人間の力ではなく、神様の不思議な力である聖霊によるものでした。

### 私たちを救うイエス様の誕生

ヨセフに語られた天使の言葉には続きがあります。「その子を、イエスを名付けなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

イエス様は、この地上にしっかりとした目的をもって誕生されました。それは、罪に苦しむ多くの人々を救うためでした。では、罪に苦しむ人々とは誰のことでしょう

うか。皆さんには関係のないことでしょうか。いいえ、イエス様は、あなたを救うために誕生されたのです。

私たち人間は、生まれた時からすでに罪を抱えています。罪とは「神様に逆らうもの」です。私たちは神様によって造られ神様に愛されている存在です。ですから、神様につながっていないければ幸せになることはできません。でも、罪は神様と私たちのつながりを壊します。もし、神様に心がつながっていないければ、良いことも悪いことも分からなくなってしまうます。そして、罪に心が支配され、自分だけではなく周りの人たちを傷つけてしまうことになるのです。

### まとめ

私たちは、みんな恐ろしい罪から救われなければなりません。私たちを完全に救ってくださるのは、イエス様しかおられません。私たちを救うためにこの世に誕生されたイエス様を信じましょう。

♪さあ イエスさまを信じましょう♪ (ホ60)

# 聖書 マタイ2・1～12 テーマ 東方の博士たち

序論

(金井信生)

キリストの誕生を知って、お会いするために東の国から博士たちが訪ねてきました。彼らはキリストを王として迎え、お従いする思いをもつてきています。

## 一、キリストを拝むために

博士たちは、一つの不思議な星を見て、ユダヤの国に新しい王が生まれたことを知りました。そしてエルサレムに来て尋ねたときに、「そのかたを拝みにきました」と、目的をはっきり告げています。ただ見たい、知りたいという思いではなく、「拝む」ためです。

キリストはユダヤ人の王としてお生れになったかたですが、ユダヤ人だけではなく世界の救い主です。博士たちは、世界の救い主、自分の救い主を探し求めて、遠くまで時間もお金も費やしてやってきました。これまで自分たちの神を拝んでいても、多くの学問を身に付けても、財産を得ても満たされない思いをいだいていたから

です。

当時、ユダヤの国を治めていたのはヘロデ王です。彼らも救い主がやがて来られることを信じ、祈り待ち望んでいたはずですが。しかし、ヘロデ王もエルサレムの人々も、博士たちの言葉に不安をいだきました。ヘロデにとつては自分の王位がおびやかされる不安であり、町の人たちは王位をめぐる争いにまきこまれる心配です。どちらも今手にしている安定を失いたくないという恐れです。

## 二、キリストを拝み、ささげた

博士たちはベツレヘムにむかい、幼な子イエスを王として拝み、宝の箱を開けて、贈り物をささげました。

まだすばらしい教えを説くわけでもなく、驚くような奇跡を行うこともない幼な子の前に、どうして博士たちは高価な物を献げたのでしょうか。それは、何もかも整った中に生まれ育つのではなく、不足だらけで苦しみばかり多い生涯を送られようとする姿に、この方こそまことの救い主であると認めたからです。

クリスマスにお生まれになったイエスの生涯は、苦しみと連続です。しかしイエスはこれを不満とされません

でした。むしろ、私たちの苦しみを負い、最後は十字架につけられて殺される道に、自ら進んでくださいました。この世の考えは、人に与えることよりも自分が受けることを求め、救い主が来られたことよりも自分の持っているものを守るの方が大事だと思えます。イエスの生き方は、そういう考えとはまったく違う生き方です。栄光を捨てて世に降られた方だからこそ、学者たちは、救い主を認め、伏し拝みました。そして喜んで高価なものを惜しみなくささげました。

### 三、キリストに従うものに

博士たちは、ヘロデ王から戻って報告するように命じられていましたが、〈ヘロデのところへ帰るな〉と、夢でみ告げを聞き、エルサレムに向かわずに別の道を通って帰っていききました。

イエスを王であるキリストとして拝んだ博士たちは、自分たちが献げたものより、もっとすばらしいプレゼントをもらいました。それは、神に愛され、見守られている平安であり、キリストに導かれて、真理に歩む新しい生き方です。

キリストに導かれ、従う新しい生き方は、自分の生涯

に対する見方を変えます。〈黄金・乳香・没薬〉はいずれも一生涯を費やすほどの高価なものです。しかし、キリストの恵みをいただいたときに、宝物は自分のものにするためではなく、ささげるため、神様の御用に用いていただくためであつたことがわかります。

ヘロデ王やエルサレムの人々のように、今持っているものを失わないようにしようと思うだけでは、不安が増すばかりです。むしろすべてを治め、すべてを知っておられる神様に委ねることで平安を得ることができるのです。

博士たちは、自らを犠牲としてささげ、自己主張の争いの絶えないこの世に来てくださった救い主の前にひれ伏しました。そして自分に与えられているものを喜んで主にささげ、自分のためではなく、他の人のために用いる生き方に決心して進んでいきました。ささげる者は主は用い、喜びで満たし、さらに祝福してくださいます。

### 結論

私たちもキリストを心に王として迎え、神から与えられているものを喜んで献げ、主の導きに従いましょう。

## 研究資料

(中島啓一)

東方の博士たちの出来事は、救いがユダヤ人だけにでなく、全ての国民に注がれる恵みであることを示す。それは、神がアブラハムに対して約束されたことであり、さらに預言者たちを通して繰り返し語られたことであった。この場面には二人の王が登場する。この世の王ヘロデと、まことの王としてお生まれになったイエスである。自分の王位にしがみつき、まことの王を拒むヘロデと、まことの王の前にひれふす博士たち。この両者の対照的な姿が、この章の重要なポイントと言える。すなわち、この恵みをもたらす救い主を前にするとき、人は彼を受け入れるか否かで、自ずと二つに分けられるのである。

## テキスト

1 ヘロデ王の代 ヘロデ大王は紀元前4年に没している。16節で「二歳以下の男の子を、ことごとく殺し」ていることから、イエスの誕生は紀元前5、6年頃と推測される。ちなみに西暦(紀元前「BC」)キリスト以前、紀元「AD」主の年)は、ローマの神学者ディオニュシウスにより、キリストの誕生を基準にして6世紀に定め

られたが、当時の知識が限定的であったことなどから、実際には数年のずれが生じた。ユダヤのベツレヘムエルサレムから約8キロ南。ダビデの故郷であり、「ダビデの町」(ルカ2・4)と呼ばれる。東からきた博士たち「博士」(ギ)マゴス)は後に魔術師の意になるが、その時代にはその意味はなく「賢者」の意であった。アラビヤ、ペルシャなど諸説があるが、大きなユダヤ人社会が形成されていたバビロンが有力である。ユダヤの宗教・文化が広く知られている地域であり、博士たちもその影響を受けていたのだろう。伝統的に3人とされるのは、贈り物が3種類であったことからの類推に過ぎない。エルサレムに着いて ユダヤの新しい王に会うのに、王宮のある都がふさわしいと博士たちが考えたのは、当然であろう。

2 ユダヤ人の王 マタイでは他に受難記事(27章)であざけりの意で用いられるのみ。ヘロデが4節で「キリストは…」と言い換えているように、預言に基づいて待望されてきた「救い主」を指す表現。ただし、当時の救い主に対する期待は政治的なものであり、その期待が外れたゆえに、受難におけるあざけりにつながっていくのである。その星 ハレー彗星(BC12年)であるとか、

794年に一度、金星と水星が魚座の中で接近する天文事象（BC7～6年）であるなどの説明がなされるが特定はできない。大切なことは、自然現象であれ、超自然的なことであれ、偶然ではなく神の導きによってなされたということである。そのかたを拝みにきまじした「もろもろの王は彼の前にひれ伏し、もろもろの国民は彼に仕えるように」（詩篇72・11）との預言の成就と言える。彼らの明快な態度は、次節以降の人々と極めて対照的である。

3 ヘロデ王は…不安を感じた ヘロデはユダヤ人ではなくローマの後押しで王位を得たイドマヤ人であった。国民からは不人気であったゆえに、預言に基づく救い主の誕生は脅威であつたらう。エルサレムの人々もみな…民の不安はヘロデのそれとは異なり、王が残虐な行動を起こすのではないかという不安であつたかもしれない。

4 祭司長たちと民の律法学者たち 彼らは旧約の預言に通じてはいたものの、それに対するふさわしい応答をすることができなかった。

5～6 ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない 「あなたは…小さい者だが」（ミカ5・2）が、「決して最も小さい

ものではない」となっている。預言の成就に伴い本来の意図が前面に出てきたと解釈して良いだろう。おまえの中からひとりの君が出て…サムエル下5・2の引用。

7～8 ヘロデはひそかに…わたしも拝みに行くから イエス殺害の意志を抱き、そのために博士らを利用しようとする策略家ぶりが表れている。

9 彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで…その上にとどまった 星がどのように動いたかは具体的に想像しにくい。より大切なことは、彼らを救い主探訪の旅にいざなった主が、最後まで確かな御手をもって導かれたと言ふことである。

11 ひれ伏して拝み…黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた 古代東方において、贈り物は服従と忠誠を示す行為であつた。教父たちやルターは、三つの贈り物に、イエスの王権（黄金）、神性（乳香）、受難（没薬）の意味を見いだす。

12 夢で…み告げを受けたので… 一切は徹頭徹尾、神の摂理によって導かれた。主の計画はこの世の王でさえ妨げることはできないのである。

参考図書 12月14日分と同じ。

## 聖書

マタイ2・1～12

## タイトル

王であるキリストを歓迎します！

## 暗唱聖句

ユダヤ人の王としてお生れになったかは、どこにおられますか。マタイ2・2

## 目 標

キリストを心に王として迎える。

## 導入

(飯田勝彦)

「クリスマスおめでとうございます！」

二〇一四年のクリスマス礼拝を皆さんと迎えることができ感謝です。皆さんも毎週クリスマスを、首を長くして待っていたでしょう。そんな皆さんの心にイエス様がお入りなることを信じます。

## 王であるキリストを歓迎しない

イエス様の誕生は、遠い昔から約束されていました。それは、神様のみ言葉である聖書に預言者を通して記されていることでした。イエス様がお生まれになる少し前、東の国の博士たちがひととき輝く星を見つけました。博士A「あっ！あそこ不思議に輝く星があるぞ」。

博士B「あれは、ユダヤ人の王として来られたキリストを表す星だ」。

博士C「キリストがお生まれになったんだ。王なるキリストを礼拝しに行こう！」

博士たちはキリストを求めて、はるばるエルサレムにきました。そこでヘロデ王にユダヤ人の王がどこでお生れたかを聞きました。しかし、ヘロデ王は「なに！ユダヤ人の王だと。けしからん。早いうちに殺してやる」と、学者たちを呼びつけキリストの生まれる場所を調べさせたのです。ヘロデ王には、王であるキリストを歓迎する心はありませんでした。かえってキリストは邪魔であつたのです。

皆さんの中には、このヘロデ王のような心はありませんか。王であるキリストを必要としない心は、自己中心な心です。それは、自分だけではなく周りの人たちを悲しませてしまうことにつながります。

## 王であるキリストを歓迎した

博士たちは「王であるキリストはベツレヘムで生まれることになっていること」を聞きました。そして早速、ベツレヘムへ向かいます。

博士A「あっ、あの星は！」

博士B「あれは、あの時と同じ星だ」。



不思議なことに、東の国で見たあの星が現れたのです。そして、博士たちを先導して進んで行きました。その星が、博士たちにとっては大きな励ましになったに違いありません。しばらくすると、星が止まりました。何とその星がとまった先は、幼子のいる家でした。

博士たちがその家に入ってみると、そこには母マリヤと共に王であるイエス・キリストがおられました。彼らは、キリストを心から歓迎し、礼拝したのです。そして、贈り物として黄金・乳香・没薬などをささげました。この贈り物には、王であるキリストに対する彼らの思いが表されています。王であるキリストを歓迎した彼らの心は、喜びで満たされました。その喜びは、彼らの生涯の宝となったに違いありません。

### 王であるキリストを歓迎しよう

王であるキリストに対する態度は、ヘロデ王と博士たちでは違っていました。ヘロデ王は、王であるキリストを歓迎しませんでした。でも、博士たちは王であるキリストを歓迎したのです。

では皆さんは、王であるキリストをあなたの心に歓迎しますか。王であるキリストを心に迎えるのと、そうで

ない人生は大きく違います。

イングランドの女王は、いくつのお城を持っています。人々は、女王がお城に居るか居ないかを見分けることができるそうです。それは、旗です。お城に旗が掲げられていると、そこに女王が居ることが分かります。

もし、皆さんの心に自己中心の自分を王とするのではなく、王であるキリストに住んで頂くなら、あなたには喜びの旗が高く掲げられます。そして、周りの人たちは、あなたのその喜びを通して王なるキリストを知ることができるようになります。

### まとめ

皆さん、いつも喜んで、どんなことにも感謝しながら歩みたいと思いませんか。その秘訣は、あなたの心に王なるキリストを迎えることです。今日、神様に「王であるキリストを私の心にお迎えします！」とお祈りしませんか。

♪もろびとこぞりて♪（こ28、こ改76、ホ30、イン24）

# 聖書 詩篇118・1・6 テーマ 恵みへの感謝

序論

(石田高保)

今日は年末感謝の礼拝である。一年の終わりを感謝で締めくくることがクリスチャンにとってふさわしい。巷では、年忘れと称して宴会が催されるが、私たちは神の良くして下さったことを忘れず、心に刻み、明日への希望とすることができる。

## 一、なぜ感謝するのか

ここで繰り返される〈そのいつくしみはとこしえに絶えることがない〉という掛け合いの言葉は素晴らしい信仰告白となっている。神が私たちと結んで下さった救いの契約は、私たちが拒み続けない限り、永遠に変わらぬ真実に貫かれており、いつくしみという日本語では表しきれない内容を持っている。言いかえればこっちが態度を変えたからといって、神は決して態度を変えなさない。きのうの神は今日の神であり、どこまでも真実をもって追い求めて下さる熱いお方なのである。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう」

(詩篇23・6、新改訳)とある。

「わたしが悩みのなかから主を呼ぶと、主は答えて、わたしを広い所に置かれた」。私たちはこれまで大小を問わず何度悩みの中を通過してきたことだろう。アダムによって墮落した世界に生きている限り、生老病死に代表される苦しみはクリスチャンであるからといって免れるわけではない。祈ったからといってすぐに悩みから解放されるとは限らない。しかしやがてそれが取り去られるか、こちらが悩みを内的に克服するかしたときに、解放の喜びに与る。まさにこのときの心境が〈広い所に置かれた〉と表現されているのであろう。過去の悩みを振り返って、共に戦って下さった神への感謝がこの一節に込められている。

## 二、神との関係を感じる

また神が私たちの味方であるという信仰の事実が謳われている。〈主がわたしに味方されるので、恐れることはない〉。神が私たちに敵対する瞬間は一度もない。その逆は無数にあるだろうけれども、神は私たちのすることなすことをなにもかも是認されるわけではない。しかし私たちの人格は途切れなく受け入れ続けておられる。神は私たちの悪い行いは憎まれるが、私たちそのものを憎むことはでき

ない。その意味で神の愛が私たちに注がれ続けるのをせき止めることはできない。その愛の泉が湧き上がるのを私たちは決して押さえつけることはできない。もし神が自分を敵視しておられるように感じるとしたら、それは間違っていると思ひ直さなければならぬ。それは自分を不必要に責めているか、自分で自分を赦していないのかもしれない。「もし、神がわたしたちの味方であるなら、誰がわたしたちに敵し得ようか」(ローマ8・31)とあるように、主の十字架のゆえに神との間に和解は完成している。

### 三、すべての事を感謝する

「すべての事について、感謝しなさい」(エテサロニケ5・18)と言われているが、これを実行すれば私たちの霊は健やかになり、奮い立たせられる。「すべて」の中には大感謝もあり、ちょっとした感謝な出来事もあり、にわかには感謝したい出来事もあるだろう。むしろちょっとした良い変化について感謝することが、ますます神により頼む心を育むのではないか。小さいと見えることに感謝すればするほど、ゆくゆくは「すべての事について感謝」することにつながってゆく。「すべて」とは例外なくという意味である。小さい変化を喜べない人は、大きな変化を期待するこ

とはできないのかもしれない。

さらなる感謝の達人は、まだ起きていない出来事について感謝してしまう。その最たるモデルはイエス様で、ラザロの墓の前で「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します」と祈っておられる(ヨハネ11・41)。もし何も起きなかつたらどうしようなどと心配している気配は微塵もない。すでに叶えられたと受け取っておられる。先取りの信仰とか、領収証の祈りとか言われるものである。それは神の子だからできたので、私たち凡人にはできないなれど言っではいけない。なぜなら主は「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」と私たちに断言しておられるからである(マルコ11・24)。原則としてイエス様にできたことは私たちにもできるというのが聖書的な信仰の基準である。

### 結論

年末にあたり、感謝なことを書き出してはどうだろうか。また家族や信仰の友と感謝を分かち合おう。きつと喜びは倍になることだろう。

## 研究資料

(金井由嗣)

## 背景

詩篇113～118篇はユダヤ人の間では「エジプトのハレル」と呼ばれ、出エジプトを記念する過越の食事の前後に歌われる習慣がある。過越はユダヤでは新年祭を兼ねているため、年の変わり目に一年間の恵みを覚えてこの詩篇を読むことはふさわしいと言えよう。主イエスと弟子たちが最後の晩餐の後、オリブ山（ゲツセマネ）に歩いて行く時に歌った賛美（マタイ26・30）はこの詩篇だったと思われる（鍋谷）。本来は神殿礼拝に向かう道すら歌い交わしたものであろう（19～20、26～27）。

## 構造

1～4節は会衆が共に歌う祭儀的な感謝の歌、5～7節はそれを承けた個人の感謝の歌である。別々の詩ではなく、一般論としての民衆の信仰告白と個人の信仰体験が交互に語られる視点の転換のリズムがこの詩の基本構造をなしている（この後の部分も同じ）。

## テキスト

1 主に感謝せよ 感謝の詩篇の歌い出し。106、107、136

篇にもみられる。感謝（する）〔ヘ〕ヤーダーは「ほめた

たえる」〔ヘ〕ハールと比較すると「はつきり」と言い表す、

告白する」という意味合いが強い（TWOT）。主は恵み

ふかく 直訳は「（主は）良い」。理由または強調を表す

接続詞〔ヘ〕キーが付いている。七十人訳、ルターなどほと

んどの翻訳者は理由を表す接続詞で訳している。「恵み

深い」という意識はルター訳の影響か。信仰者との人格

的關係において神が「良い」と述べているのであるから、

優れた意識といえる。そのいつくしみはとこしえに こ

こも理由を表す接続詞〔ヘ〕キーでつながっている。1～4

節においてこの後半部分が主題として繰り返し強調され

ている。いつくしみ〔ヘ〕ヘセドは契約において変わらな

い神の真実を表す、旧約思想においてきわめて重要な概

念。絶えることがない 原文の意味を補った意識。

2～4 イスラエルは…アロンの家は…主をおそれる者

は言え イスラエルの会衆、祭司とレビ人、異邦人の改

宗者の3グループに指揮者が呼びかけ、それぞれが「そ

のいつくしみはとこしえに」と交唱する賛美の情景を想

定することも可能だが（レスリー）、むしろ三者を重ね合

わせることで全会衆に呼びかけていると理解した方が良

い（石黒）。なおそれぞれに呼びかけの言葉〔ヘ〕ナ―が付されているので、新改訳のように「さあ。よ」と訳した方が原文のニュアンスに近くなる。

そのいつくしみはとこしえに　ここでも接続詞〔ヘ〕キーが用いられているが、この場合は言い表すべき内容を表す従属接続詞である。用法は違っても同じ言い回しが連続して用いられることで一貫した叙述のリズムを形成している。

5 わたしが悩みの中から主を呼ぶと　ここから主語が「わたし」に変わる。4節までに歌われた主への信仰が人生の具体的な現実（悩み）の中で試され、実証されたことを証しているのである。主語が一人称の部分では主の名（ヤハウェ）の短縮形〔ヘ〕ヤハが好んで用いられている（5、14、17、18、19）。一般論の信仰では済まされない苦難の中で個人的・人格的な神との交わりを経験していくのであり、その経験が共同体の信仰に（証しと賛美を通して）還元され、民全体の信仰体験として共有されていくのである。主は答えて　ここの「主」も短縮形「ヤハ」。呼びかけに答えてくださる人格的關係がよく表現されている。広い所に　「悩み」〔ヘ〕メーツアルの語源

は「狭い」〔ヘ〕ツアル。苦難の中で縮こまった心の状態をよく表している。それゆえ、そこから解放された状態は「広い所」〔ヘ〕メルハーブと表現されるのである。

6 主がわたしに味方されるので、恐れることはない  
直訳は「主はわたしのもの（または「わたしに近くあられる」）。わたしは恐れない」となる。23・1「主はわたしの羊飼ひ。わたしは乏しいことがない」と同じ構文である。人はわたしに何をなし得ようか　この節の前半と後半に同じ目的語「わたしに」〔ヘ〕リーが配されることによつて、主語「主が」と「人は」の対比が明瞭になる。「主が」ともにえられるなら、「人が」信仰者に手出しを用いることは不可能なのである。「人」に〔ヘ〕アーダームを用いることによつて、神との対比がより明確になっている。

参考図書 鍋谷堯爾『詩篇を味わうⅢ』、石黒則年（新聖書講解シリーズ）、E. A. Leslie, Theological Wordbook of the Old Testament.

## 聖書

詩篇118・1〜6

タイトル  
暗唱聖句

神様ありがとう！

主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。  
詩篇118・1

## 目標

一年の恵みを覚え、神に感謝をささげる。

## 導入

(松浦みち子)

今日は今年最後の日曜日ですね。皆さんにとつてどんな一年だったでしょう。楽しかったこと、悲しかったこと、悔しかったこと、嬉しかったことなどいろいろありましたねえ。神様の守りと導きを感じて一年をしめくくりましょう。

## 主に感謝せよ

この詩篇は、イスラエルの人々が神様を礼拝するときに歌った歌といわれています。しかし、イスラエル人だけでなく、教えを聞いてユダヤ教に改宗した他国の人もみんな主に感謝をささげようと、呼びかけています。

1節 主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

29節 主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

イスラエルの人々は、エジプトでの苦しい奴隷の生活を決して忘れることなく、苦しみの中から叫び声をあげたとき救い出してくださった神のみ業をこころに留めて生きていました。ですから、現在どんな悩みや苦しみ、試練にあつても、やがて神様は私たちをその中から救いだし、新しい世界へと導いてくださると信じて歌ったのです。何とすばらしい歌でしょう。さあ、私たちも一緒に唱和しましょう。(主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。)

## 祈りの基本

祈りの基本は「神を呼ぶ」ことです。

「わたしが悩みの中から主を呼ぶと、主は答えて、わたしを広い所に置かれた。」

広い所は狭い所よりも開放感があつて、気分がのびのびしますね。でもここではそんな広さのことをいつているわけではありません。八方ふさがりの悩みの中から、主を呼ぶと、主は答えてくださって人の思いを超えたすばらしい恵みへと導いてくださるという意味合いがあります。



す。どんな厳しい現状でも希望が湧いてきますね。

また、エレミヤさんは苦しみの中で神様の約束の声を聞きました。「その時、あなたがたはわたしと呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く」（エレミヤ29・12）。なんと心強いことでしょう。

### 神ご自身が私たちの味方

「主がわたしに味方されるので、恐れることはない。人はわたしに何をなし得ようか。」

神様が私たちの味方であるなら、勇気百倍ですね。パウロ先生は、福音を宣べ伝えたことで鞭打たれたり、石を投げつけられたり、牢屋に投げ入れられたり、さまざまな迫害を受けました。しかし、「神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか」（ローマ8・31）と、イエス様の愛を伝え続けました。

あなたは今悩みの中にいますか？ 人に言えない苦しみや心を持っていますか？ 主に向かって叫びの声をあげ、主を呼びましょう。主は祈りに答えて私たちを助けてくださるお方ですから。

### ある研究者のあかし

ブラジルから留学して日本の大学で研究を続ける青年

は、南米の淡水に生息する鰯の繁殖生理学について研究していました。ところがなかなか実験がうまくいきませ

ん。二年ほどたった時、研究に適さない魚を使つて実験をしていたことがわかり、自分は何のために二年間を過ごしたのだろうと、落ち込んでしまいました。クリスマスチャンの彼は、「神様、神様」と神様を呼ぶことしかできませんでした。そんなある日、教授から鰯の耳石を磨くように頼まれたのです。耳石は内耳にある石のような物質です。直径八ミリの耳石を磨くと年輪のような輪が見えます。木の年輪で樹齢がわかるように、耳石の輪の数で魚の年齢がわかります。さらに調べると毎日形成される〇・〇一ミリ間隔の日輪があり、これによってその日の水温までわかるそうです。教授が「魚の成長の良し悪しに係らず、毎日一つの日輪が形成されるんだよ」と言いました。彼は、鰯のような小魚でさえ、一日一日の記録が耳石に刻み込まれている。同じように神様は、自分の流した涙、叫びをちゃんと聞いて覚えていてくださると勇気付けられました。その後、奇跡的な発見に導かれ、祈りは必ず聞かれると証しています。ハレルヤ！

♪祈ってごらんわかるから♪（PW7、新聖歌481他）



救い主なる神を知る

マタイ 21

●キリストのみわざ

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

10月5日

嵐を静めた  
イエス

マタイ 14・22〜33

同27節

12日

見あげた信仰

マタイ 15・21〜28

同28節

●旧約③モーセ

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

10月19日

モーセの誕生

出エジプト 2・1〜10

ヘブル 11・23節

26日

過越

出エジプト 12・1〜14

同13節

●クリスマス・年末

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

11月2日

荒野で与えられた食物

出エジプト 16・31〜36

同35節

9日

祈りの手

出エジプト 17・8〜16

同11節

16日

十戒

出エジプト 20・1〜17

同3節

23日

収穫感謝

信じて見上げる

民数記 21・4〜9

同9節

11月30日

アドベント

インマヌエル

イザヤ 7・1〜17

同14節

12月7日

預言 救い主誕生の

イザヤ 9・1〜7

同6節

14日

ヨセフへの告知

マタイ 1・18〜25

同21節

21日

クリスマス

東方の博士たち

マタイ 2・1〜12

同2節

28日

年末感謝

恵みへの感謝

詩篇 118・1〜6

同1節

## おわりに

『牧羊者』二〇一四年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

今回の教師養成講座は、前号に引き続き、神戸中央教会の田中恵子姉に「♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！No.2」を書いていただきました。「牧羊ひろば」はお休みいたしました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\* 分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円＋税でお送りします。  
信徒局 教会教育室 ホームページ  
<http://cs.jccj.info/>

\* ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。  
神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

聖書講解	石田高保師	金井信生師	高橋頼男師
研究資料	山田和幸師	小平德行師	金井由嗣師
メッセージ例	宮澤清志師	和 田 治師	飯田勝彦師
ワーク(A)	中島啓一師		
(B)	松浦みち子師		
(C)	水野晶子師		
中高科へのヒント	鎌野幸師	吉田美穂師	野勢かほる師
子ども聖書日課	勝田幸恵師	山下大喜師	
フラッシュカード	上森恭子師	田中裕明師	
み言葉カード	石田高保師	後藤健一師	
イラスト	丹中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
ワーク打ち込み	丹羽遥姉	松浦あん姉	金田ゆり師
校 正	多田豊子師	後藤栄子師	
	長田栄一師		
	中島啓一師	加藤 清師	山田和幸師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

## 聖書教育教案誌 牧羊者

### 二〇一四年度 Ⅲ巻

二〇一四年十月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室  
企画監修 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-5511  
電話 (078) 575-5511

\* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み